



# 福井震災体験談集

福 井 県



1041163070

## 巻頭言



まだ記憶に新しい平成7年1月17日に発生した兵庫県南部地震は、6千4百余名の犠牲者をもたらしました。私たちは、テレビ等による連日の報道によりリアルタイムでその被災状況を目の当たりにし、改めて自然の脅威を見せつけられました。

その後、阪神・淡路大震災の教訓を踏まえ、災害対策基本法が大幅に改正され、また、地方自治体では広域応援協定の締結が進みました。

本県においても、近隣府県との災害時応援協定の締結をはじめ、防災ヘリコプターや衛星車載局の導入、防災情報ネットワーク等の情報システムの構築のほか、ライフラインや建築物などの耐震化の促進、災害ボランティアの育成など、防災体制の確立に努めております。

さて、本県は、戦後間もない昭和23年6月28日に3千7百余名もの犠牲者を出した福井震災を体験しております。福井地震を契機に震度7（激震）が新設されるとともに、建築基準法の改正も行われ、戦後の地震においては阪神・淡路大震災に次ぐ被害規模でした。

戦後の混乱の中での大災害でしたが、先人達は不断の努力と大いなる郷土愛を持って復興に尽くされ、その回復の早さには目を見張るものがありました。

あれから50年の歳月を経た今日、福井震災の記憶は過去のものになりつつあります。私たちは、この節目の年に今一度、福井震災の記録と向かい合い、地震被害に対する心構えを新たにしようではありませんか。

このため、県では、福井震災50周年に当たる本年、市町村や防災関係機関との連携のもと、防災フェアや大規模な防災訓練、そして福井震災犠牲者追悼式などの福井震災50周年事業を展開いたしました。

そして、今回、福井震災体験者の方々から埋もれつつある貴重な記録や後世に伝えるべき数々の教訓をお寄せいただき、1冊の本にとりまとめました。

この冊子が、昭和23年に福井県を襲った大災害を後世に伝えるとともに、防災意識の高揚のための一助となれば幸いです。

終わりに、体験談を寄せられた多くの方々の郷土を想う熱い情熱とご努力に深い敬意を表しますとともに、本書が多くの県民の皆様にとって『震災に対する心構え』となることを祈念申し上げます。

平成10年12月

福井県知事 栗田幸雄

# ● 目 次 ●

I 福井震災の概要 .....	1
II 福井震災体験談 .....	7
・体験談 68名 (50音順に掲載)	
III 福井震災50周年事業の概要 .....	55
(1) 福井県防災キャンペーン .....	55
(2) 福井震災50周年犠牲者追悼式 .....	59
(3) 近畿府県合同防災訓練 .....	60
(4) 日本地震学会 一般公開セミナー「福井地震から50年」 .....	61
(5) 世界震災都市会議 .....	62
(6) その他 .....	63

# I 福井震災の概要

# 福井地震の概要

1. 発生日時 昭和23年6月28日 17時13分（夏時間）

2. 地震規模 マグニチュード 7.1

3. 被害状況

	福 井 県	総 計
死 者 数	3,728名	3,769名
負 傷 者 数	21,750名	22,203名
全壊家屋数	35,382戸	36,184戸
半壊家屋数	10,542戸	11,816戸
焼失家屋数	3,851戸	3,851戸

中央気象台

「福井地震調査概報」

振動が激しかったのは、30秒～40秒くらいで、家屋は5～10秒くらいの間に倒壊したと言われている。

福井平野にある集落では全壊率が100%に達するところも多く、この地震を契機として、気象庁の震度階級に新たに震度7が設けられた。

戦後の地震としては、兵庫県南部地震（平成7年1月17日）に次ぐ被害規模であった。



無残な姿をさらした大和百貨店ビル。

福井地震を伝える新聞の第一報は、どこも

このビルの写真を使った。

福井市民にはシンボリックな建物だった。（福井市中央1丁目）





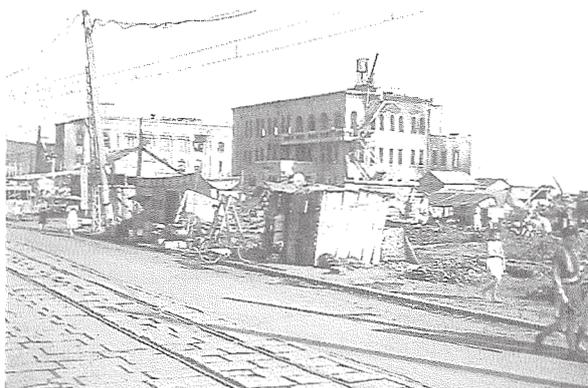
福井市内で一番の高層ビルだった大和百貨店の倒壊現場に向かう人たち。  
スコップを片手に、日差し避けの編み笠をかぶっている。(福井市中央1丁目)



中央の建物は県織協ビル。  
その前には、木造の仮説住宅を建てる人たちの姿が。

震災直後だが、道路沿いには早くも果物などを売る人の姿が見える。

(福井市大手3丁目)



焼け野原になった福井市の中心部。  
戦災から復興しつつあった町並みは、再び廃墟になった。(福井市内)

焼け焦げた福井鉄道福武線の路面電車。  
震災後、周辺の建物火災で類焼したらしい。  
被災者が行き交う中、進駐軍の小型四輪駆動車が見える。(福井市中央1丁目)

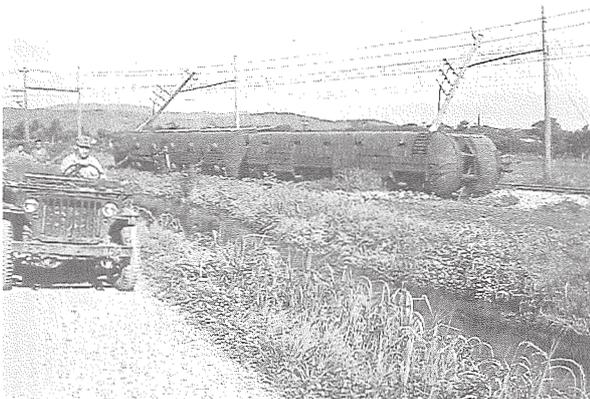




根元から壊れた旧国鉄北陸本線の九頭竜川鉄橋。  
橋はいたる所で壊れ、交通がしばらく遮断された。  
浅瀬で水浴びや洗濯をする姿も見える。  
鉄橋のほか、橋の大半が壊れ、あちこちで渡し舟が復活した。  
(福井市内)



橋や鉄橋の倒壊で、九頭竜川の往来に復活した渡し舟。



電柱をへし折り、夏草の中に横転した京福電鉄  
越前本線の車輛。  
左は被害状況を調べに来た進駐軍の小型四輪駆  
動車。(福井市内)



倒壊した繊維工場。繊維関係だけで、被害は10億円にも上ったという。(福井市内)

救援、視察に訪れた進駐軍の車の周りに集まる被災者たち。上半身が裸の子どもたちも見える。道沿いの家屋は、ほとんど全壊状態。撮影場所は不明。



福井城跡の県庁敷地内にできた巨大な進駐軍の救援テント。けが人の救出や炊き出しなどの救援活動にあたった。



震災直後、進駐軍はせっけん13万個、タオル10万本など、大量の日用品を放出した、との記録が残る。(福井市大手3丁目)

<提供：朝日新聞福井支局、撮影：ジェームス原谷>





## Ⅱ 福井震災体験談

## 福井大震災五十周年を迎えて

福井市 浅井 貞次郎

昭和23年6月28日の地震当日、私は福井県の警察官をしておりまして貴重な体験をいたしましたので、そのときの状況をありのまま述べさせていただき、ご参考に供したいと存じます。

当時、私は警部補として警察本部の防犯課に勤めており、当日は勝山署へ統制物資取締りの研修会に坂下部長と二人で出張しての帰りに、京福電車の中で地震に会い九死に一生を得ました。

その日は梅雨の最中でしたが、朝から曇り空で風は全く無く、むしろ暑くて道行く知人との挨拶も「今日は何か起きそうな気がしますね。」と言葉を交わすくらい息苦しい日でした。当時はサマータイムと言って時計の針を一時間早くしてありましたが、二人は仕事を終えて午後4時過ぎの勝山発の福井行きに乗車し、東古市まではガラ空きでしたが、東古市駅で永平寺参拝帰りの四国方面の団体客が多数乗車されて満員となり、私たち二人は進行方向の右側に私服で座っておりました。電車が新保駅を出て間もなくスピードの出たところで、にわかにグラグラと揺れだしたので、始めは線路に石でも乗っていたのかなあ？と想着ておりましたら、しばらくして東側の方へゆっくりと傾きかかったので、こりゃ転覆するかも知れないぞ？と、感じました。横転する前に何秒か相当長く感じましたが、ゆっくりと傾いてパタッとかやっただようように思います。その瞬間、私の頭の中を駆けめぐったことは、物心のついた少年時代から、その時点までに経験したことがらのうち、特に印象に残っていたことが次から次へと走馬灯のようかけめぐり、もうこれで人生も終わりか？といった実感は、50年を経た今日でもはっきりと覚えております。

しばらくして、私たちが気がついたときには人の上になっており、乗客全員がシューンと静かで誰も声をあげる人はおりません。私たちが気を取り戻してから間もなく、電車の運転士と車掌の二人は職業柄気がついて動き出したので、人の上を歩いて前方の窓口から車外脱出したら車内がザワザワとやかましくなった。電車が倒れた側の方から「痛い、助けてくれー」と叫ぶ声がするので、少し離れてすかすように身をかがめてよく見ると、あわてて窓から飛び出した人が窓枠の下敷きとなってもがいているのを目撃した。私服であった私たちは運転士に身分告げて大声で「私たち二人は福井県の警察官です。今、数名の人が電車の下敷きとなって助けを求めておられるので、元気な男性のお方は車外へ出られたらここへ集まって下さい。」と手を挙げて告げたところ、数十名の人揃われたので二手に分けて、地面が幸い畑地であったから素手で土を掘って負傷者を引き出してもらうように指示をしました。

周囲へ目を向けますと、人家が砂煙を上げてドーン、ドーンと大きな音をたててつぶれ、あ

たかも地球が破裂したようで、とても生きた心地はせず、一つの地方を襲った地震とはとても思えませんでした。

それからどれくらい時間が経ったか。しっかり覚えておりませんが、下敷きになっている人の救出作業がようやく軌道にのった頃、福井市内へ目をやりますと、赤黒い炎を上げて盛んに家が燃えておりますので、こりゃいかん、と思い現場の救助作業の指揮は運転士と車掌に頼んで開発の方へと向いましたが、余震がひどくて、とてもまともに歩ける状態ではないので線路の中を這うようにして進みました。そのとき横にいた坂下部長に「手から出血していますよ。」と言われて自分の左手を見たら内側から血が出ていて指先まで赤く染まっていたので、持っていたタオルを巻いてもらって、県庁内の県警本部へ通れる道を選んで急いで帰宅しました。その間の道中で両側の家屋は殆ど倒壊しており、あわてて外へ脱出しようとした人たちが家の鴨居の下敷きとなり、頭や首あるいは胸や腹部あたりを当てて殆ど即死の状態の人を20名余り目の前で見たが、火の手が迫り手の打ちようもありませんでした。

私がこの災害を体験して感じたことは、決して慌てないで机など身を守る下へ入って状況を見て脱出の方法を考えることと、外出する際には必ず火気を扱う器具の元栓を切っておくこと、またタオルの一本位は常に小物入れの中へ入れて持ち歩く習慣を身につけることを、痛感いたしました。

その後50年を経てあらゆる面で様子が大きく変わってきておりますが、近頃、国の内外において地震が多発している情報をよく耳にしますので、何時発生するか判らない災害に備えて、地域、職域で自主防災組織連絡協議会をつくって積極的に努力しておられることはよいことですが、ややもすると末端まで徹底せず途中で止まってしまうことが考えられますので、隣保班組織をしっかりと固めておくことが大切であろう、と思えてなりません。

と、申しますのは、立派な会則ができて、昨今の地域の状況は日中不在の家庭が多く、長寿に伴い高齢者の二人暮らしや独居家庭の増加、耐震建築物が増えていると言われてはいるものの十分とは言えず、もし地震が起きた場合のことを想定すると50年前とは比較にならないくらい大きな被害が出るのではなかろうか？と思いますから、平素から有事の際に備えて防災、避難誘導での訓練が大切でしょう。

## 二伸

私は昭和31年4月23日の芦原温泉の大火の際、県警芦原警察派出所長として走りまわった体験もありますので余計気がかりです。

# 福井震災の体験

武生市 浅川 忠 男

終戦でほっとし、やれ復興だと力んだ折柄、昭和23年の6月28日午後5時14分、突如として未曾有の烈しい大地震が福井地方を襲った。震源地が坂井郡の丸岡町と坂井町の境界付近だといわれてきただけに、福井市、金津、丸岡、松岡、森田の一市五町では大火災も発生し、一瞬にして修羅のちまたと化し去った。

おおよそ2、3分間ばかりだったとは思いますが、何かにつかまっていなければ、立ってはおれぬくらいの強さだった。最も強いユレは、20秒ないし30秒ばかりもあっただろうか。このユレの最中に多くの家が倒れていった。この時に、すごい土埃が舞い上り、しばらくは煙幕でも張りめぐらされたように見えた。

また交通、土木関係についても、国鉄、私鉄とも、北は石川県境の牛の谷から鯖江までいたる間、トンネルは崩壊、すべての通信関係は途絶し、徒歩による連絡以外は全くないという状態。

そうした中で、県庁は幹部をはじめ職員も通勤もままならない状況の下で、昼夜兼行復興にたち上った。また職員組合長は罹災地帯以外の支部分会に救援カンパを要請すると共に、全国各都道府県職からの有難い救援カンパを含め、罹災組合員200人に対して配布してきた。

# 地震体験談

小浜市 有川 澄

突然の地震、漁港の岸壁にいた時に見た光景は、大きく跳ね上がる波と横に立っている給水塔が今にも倒れそうに揺れている姿だった。

小浜に居た私は、それが福井地震であることを知った翌々日、小浜漁連の救援物資を満載したトラックの荷台の上ののって福井に向かった。すれ違いも困難な敦賀からの旧国道は恐怖の連続だった。走りながら福井で見た最初の光景は、花堂の町が軒並み押し並べて1階が潰れその上に2階が乗っている姿だった。トラックの上から写した呉服町は、一面の焼け野原ですごい異臭がした。あとは歩き回って写した大和ビルはまだ煙が出ていたし、県庁前の大きな亀裂も記録した。なぜだったのか、京福の線路づたいに歩いていたら、電車が横倒しになり、その横に背広姿の遺体があり靴が無く靴下のままだったのが忘れられない。

近くの家からは、亡くなったおばあさんを戸板に乗せて運ぶ姿も目撃した。まだまだあるが、

今もって忘れられない貴重な体験である。

## 福井震災の被害状況と教訓について

福井市 五十嵐 智 子

当時、私は和田農協に勤務しており、仕事が終わりに外に出て2～3分、ゴホーという音が聞こえてくると同時に、グラグラと揺れて田圃道に伏せていた。

しばらくすると目の前で和田小学校がメリメリと壊れ、農協も二階が下にドンと落ちた。まわりの見える村々は土煙、とにかく家路に急いだ。

上北野集落全戸が全壊した。当時の木造住宅の地震に対する弱さを見せつけられた。その中で一軒だけ倉が残った。それは地下に松の杭を何本も埋めて倉を建てたと聞き、木造住宅でも基礎工事が大事な事を知った。又、茅葺屋根の家は屋根が軽いので家が毀れても家財の損傷は少なかった。

家では兄が戦死し男手がなく、女だけで途方にくれた。村の人のお世話で岐阜県から人夫さん(4～5人)に来てもらって、丸3ヶ月、潰れた家の後片付けをしてもらった。

地震は地域全体がやられるので近所の人には手伝ってもらえない。災害のない地域との広範囲の助け合い計画の大切さを痛感した。

## 福井震災の思い出

敦賀市 伊 藤 末 吉

当日はまだ日が高い夕方だったと思う。

仕事の帰り、運河添いの道を歩いていた。突然、大きな地鳴と共に足元がグラグラ、思わず座りこんだ。向側の家を見ると、四メートル位の道幅を挟んで、両方の家の屋根のひさしが触れる程揺れていたのを思い出す。

当時、私は小型機帆船に乗っていた。二、三日後、海運局の要請で勤労報任隊員を乗せて三国港までとの事。既に鉄道も道路も壊れて、海上輸送が唯一の方法との事。当日は、舞鶴、丹後方面の船も参加。20隻位の船団で、私共の船には刀根、正田方面の報任隊20名位、約5時間の航海で三国港へ。

帰路はむしろを積んでとの事。現場を見に行ったら驚いた。縄とむしろが一杯入った倉庫の屋

根が落ち、中の品物が支えで倒れず、それでもどうにか夕方までに積込みを終了させ、出港できた。

当時の思い出は、屋外から間近に見た震度5の家屋の揺れと地鳴。忘れ得ない強烈な思い出。

## 地震体験談

武生市 上坂 照雄

駅ホームで帰りの列車を待っていた。ゴーゴー、突然大きな横振れ。ガクン、ガクン地震だ。ホームのスレート屋根がバラバラと落ち始め、友人とホームから飛び降りた。強い横振れに引続き、つき上げる縦振れが二度三度続くなか、駅裏の京福電鉄の事務所がバリバリと大音響のもと瞬時に倒壊。只々、地震のエネルギーの強さに驚くばかり。

ふと、我に振り返り足元に気付き、青白く細かい砂が線路一帯に吹き揚げ、靴もズボンまで汚れていた。更に、目を写すとホームが3、40センチメートル位沈下しているのに気付いた。

駅前へ出たが、一面モウモウとホコリが舞い上り、視界も悪く薄暗い中で多くの被災建物と、帰宅を急ぐ大勢の人が走り廻っていた。柱に足を取られ助けを求めて呼ばれる女性を、通りがかりの2、3人の手をかりて無事助け出した。

余りにも凄まじい状景を見て、我が家を案じ、線路添いに足早に走った。足羽川鉄橋上で、ふと市内を振り返ると、大地震につきものの火の手が、2、3ヶ所から白い煙が立ちあがっていた。

## 福井地震の体験

福井市 宇野 憲治

当時、県涉外課勤務の私は、当日課長と二人、視察のため来県の英国高官を出迎えるべく福井駅にいた。改札口で到着時間を確かめ車に戻ってきたとき、突如「ごおっ」という音とともに無気味な震動が起り、足元の路面に地割れが走り、危険を感じて車に飛び乗った。

後部車窓に眼をやると、七階建の大和デパートが崩壊していくではないか。「ああっ」と思わず声を出す。2~30度傾斜して止まった。生涯忘れることのできない光景を見たのである。

目を近くに転じると立ち並ぶ店舗が倒壊し、中から逃げ出してきた人達がその下敷きになり、黄塵が立ち込める。阿鼻叫喚、さながらこの世の生地獄である。

それからどれだけ経ったか。課に戻るべく車を出したが、倒壊した家屋、電柱、散乱した電線、道路の亀裂等が行く手を阻む。ようやく御本城橋に辿り着くと、若い母親が少女を抱いて車の前に立ちはだかり「幾久まで送って下さい。」と哀願するではないか。見れば少女の足はぶらりと下がり多量の出血。このままでは生命が危いと感じ、車に乗せて庁内へ運ぶ。幸いにも、既に軍政部による仮救護所が設けられていたので、応急手当をそこに託して課に戻った。それから三日三晩、不眠不休で応急対策に取り組み、家にも帰らず、後日親父に怒られた記憶が50年を経た今も甦ってくる。

## 福井震災について

福井市 大 濃 泉

### 1. 震災当日の様子

小生、昭和22年4月から、初めて鯖江保健所へ勤務し、まだ日も浅いこの日震災に遭遇しました。

自転車で通勤の小生は、下り坂に向っていましたが、突然前に進まず、どこか故障かと思いきや、建物のガラスは破れ家屋は大きく揺れ、田植えが終わった田の水は道にあふれて大きな地震だと、震える有様でした。

自宅は一応無事であることを確認し、すぐ保健所へ急ぎました。

### 2 災害防疫活動状況

翌日から、被害の大きかった福井市周辺や坂井郡方面へ、安否確認や消毒剤の配布、被害者の病院への搬送等を行う日々で、数日後、ある学校の校庭で、カヤを吊って寝て入浴もドラム缶を利用していたことでした。

1ヶ月余経過して家路につきましたが、体は消毒剤の臭いと顔はまっ黒で、髪ボウボウの姿は、家族も小生とは気付かなかったようです。

### 3 緊急時の対応

終戦後の混乱期で、止むを得なかったこともありますが、当然のことながら

- 特に公務員は、緊急時にすぐ対応できる体制の確立、ならびに上司の指示に従って行動することが肝要である。
- 一般住民も同様で、日頃の備えが必要である。
- 災害に備え、危険箇所の点検と整備が必要と思われる。

## 福井震災の体験

芦原町 奥 公明

仕事を終え福井駅から帰宅途中、私が乗った1輛目の列車が丸岡駅を通過間もなく、左右に大揺れしたと思った瞬間、ギューと無気味な音がして、マッチ箱を押しつぶしたように線路上に横倒しとなった。私達はびっくり仰天、腰をかがめ悲鳴の中、破れ窓から外に飛び出た。地面は大揺れで船に乗っている様だった。坂井平野一帯の集落から土埃が舞い上り、地響きと強い振動で、地球上に異変が起り世も終りかと思う衝撃が脳裏を突く。

道は、倒れた家で遠回りしながら早走りで我が家につくと、畠の中でうずくまる家族、村人達と0才の甥が埃まみれから救出されたと聞き、喜びと嬉しさで胸が一杯になった。

その夜、一晩中燃え続けた金津の街も、朝方小康状態となったので、兄の安否を確かめたいと一人出向いたが、途中軒先で首だけ出し圧死した凄惨な情景を2、3目の当りにし、早々に走り帰ったことも記憶に生々しい。

当時、罹災者への救援物資の配布は何により急務であった。道路の亀裂、陥落による寸断と少ない車輛の時代での大量物資輸送は、九頭竜川を川舟で下り三国港から坂井地方事務所内に山積された。その任に当たった私は、不眠不休でその配分に勤めた。特に罹災地に近い堤防に舟から山積した必需品は、配分するまで火災(マッチ箱が多い)・盗難・風雨から守るための監視、管理の責任になやまされた一味違った体験が今甦がえる。

余りに多忙で帰宅しない日も多かったが、我が家の後始末は父母達でいつ果てるともなく続き、丸太、竹、藁を縄で結んだ田舎ならではの仮小屋住いも一家団らんの楽しい場であったことは、今も心に残って忘れない。

## 陥 没

三国町 奥 孝子

「ア、地震」と大声で男叫ぶ。震動が強い。震動が又続く。海岸の波、少々高し。此所にいると危険。帰宅の道路を急ぐ。地鳴りが地盤が響く。歩く事が分からない様な、足裏が土に踏張っているのか靴もなく素足であった。

変だと思うと地盤が地割れし、私は陥没している中に。足が動けない。足首が痛い、涙が出る。水が流れて何か目の中に変な動物がいるよう思う。地割れが又大きくなる。足が動けない。今度は水が噴く勢いが強い。私の足は依然として地中。

噴く水に何か黒い小さな分からない動物が地面に、水煙と同時に落ちた。小さな鼠ではないか。地面に水が流れ出した。今だと思って、懸命に足をなだめるようにしていた。不思議に、あの動かなかった足が、「水」「風」「砂」「流れてきた水草」陥没が響と共に泥と重なって浮いて、私の足も楽になり、感謝し、嬉し涙でした。

15分で帰れる家が1時間30分と、地中の間と自然の力、人間の尊さを知りました。父は実家に手伝いにゆき夜中12時に帰宅。

## 激震地から外れたものの思い出

敦賀市 小 串 武 久

当時はサマータイムが実施されていて、時計の針を1時間早くしていたのと、役所の終業も午後4時であったので、陽の高い中に帰宅していた。私は普段着になって田圃道を家から100メートルも歩いたのだろうか、突然、足元が揺れたので家の方を見ると、家も大きく揺れているので、これは地震だと直感した。

直ぐ、家に帰ってラジオのスイッチを入れたところ、福井地方を震源とする地震があった、と繰り返し放送されていた。後から考えると、地震の直前には「ゴーツ」という地鳴りのような音がしたのと同時に、樹木の枝が揺れる音だろうか「サーツ」という音が遠くでしたように覚えている。

その夜、ともかく福井までゆくことになり、武生まで汽車に乗り、福井まではトラックに便乗して木田入口まで来たものの、倒壊家屋に阻れて県庁までは歩いて辿りついた。しかし、災害体制が整っているわけではなく、救援作業もできないままに引揚げざるを得なかった。

## 震災時の日誌より

福井市 河 原 賢 典

### ■ 6月28日

その日、公務で石川県に出張した帰りの車中で、列車が北福井駅（現在の高木町辺り）に到着して間もなく発車しようとしていた瞬間の5時14分、激しい上下運動と共に列車は左右に大きく揺れ、窓外の田圃は大波を打つように揺れ動いている。

手摺りにつかまり必死になって身を守りながら、恐怖と乗客の怒号に渦巻く中を列車から飛

び降りれば、前三輦の客車は汽関車もろとも転覆、遥かに市内を望むと赤黒い土煙がもうもうと市街を包み、早くも火災が発生している。

あまりの激震に立っていることが出来ず道路にしゃがみこんだ途端に、付近の屋根瓦がバラバラ飛び散り、不気味な音を発して家屋が倒れ始めた。まるでマッチ箱をグシャリと押し潰したような響きである。鉄道はアメのようにひん曲り、枕木は異様な格好で全部浮き上がっており、田圃の稲はメチャクチャになっている。

市街に入ると道路は大きな亀裂が生じ、水道管の破裂する音がパンパンと響いてくる。子供の泣き声、人の叫び声が黒煙を通して悲痛に聞え、街は一種異様な臭気が漂い阿鼻叫喚のちまたと化した。裁判所は横倒れになっている。七階建の大和百貨店も倒壊している。

県庁に行くとお城の石垣があちこちで崩落し、特に南東の石垣が大きく崩れており、本館と議事堂は倒壊をまぬがれたが、庁内は机・椅子・本棚等がひっくり返り足の踏み場もない惨々たる状態、木造二階建の別館は全部倒壊してしまっていた。

家屋の倒壊と共に各所から火炎が発生。たちまち火の海と化し、被災者の救いを求める叫喚に全市は生地獄さながらの形相を呈し、猛火は夜に入っても壮絶をきわめ、翌未明まで燃え続け、荒れ狂う火焰にのまれて不帰の客となった人は数知れない。

#### ■ 6月30日

早くもたくましい復興の色が満ちて、各府県の救助物資が到着している。北陸道には、これら救助隊がトラックに救助の物資を満載して、続々と福井に向って来る。敦賀、福井の街道はトラックとジープの列が砂煙を上げて続き、太陽の顔さえ見えない位で嬉しい同胞愛の表現である。連合軍、警察隊、医療班、救助のトラックがめまぐるしく往復する光景が、地震の惨状と共に一層悽愴を加える。

鉄道の方は、必死の復旧作業により、一両日中に木田の操車場（現在の南福井）までが開通の見通しがつき、災害地への補給路が拡大されることになった。

今日も、依然として不気味な地鳴りと共に余震あり、不安な状態なり。

国際劇場、東宝では映画を鑑賞中の多数の観客が圧焼するという大惨事となり、翌29日までくすぶり続け、椅子に座ったまま並んで死んでいる黒焦げの死体が焼けた柱の隙間や、瓦の間から喰み出て、目も当てられない惨状を呈し、あの時のすさまじい様相をまざまざと描き出している。近親者の骨を拾う姿はひとしお人の涙をさそい、この世の姿とは思えなかった。

#### ■ 7月1日

揺さぶられ、押し潰され、そして焼き尽くされたあの裂震に見舞われてから5日が過ぎようとしている。何も知らずにいたあの日、あの瞬時、そして生地獄そのものであったあの時を偲ぶ。

間断なく続く余震に被災者の神経はとがっているが、ようやく虚脱状態から抜け出し、何よ

りも我家の再建を合言葉に持出した家財を集めて焼跡に帰り、焼トタンや廃材を集めたり、壊れた家の取り片づけ、バラック建の家造り等に立ち上がりにかかった。自力で復興に精出す人々の力強い槌音が響いてくる。

一瞬にして廃墟と化し、ただ荒涼たる廃跡に立てば、市内が悪臭と熱気の中に余震におののきながら横たわっている。駅前通り、本町通り、大名町通り、呉服町通りと市内の目貫きの繁華街は、一夜にして灰尽に帰し、かつてその威容を誇った大和百貨店の七階建が中央部分の落下で大きく傾斜した光景は悽愴をきわめ裂震を偲ばせる。どこの家も無残に倒壊し、水道管の破裂で道路は水浸しである。人絹倉庫は未だにくすぶり続けている。

一巡眺める市内一帯の惨状は、目を覆うものがある。

終戦直前の昭和20年7月19日の空襲により全市焼野原と化しながら、全国でも珍しい華やかな復興を遂げ、創<sup>そうい</sup>痕、ようやく癒えた3年後の今日、再び焦土と化した悲しい運命であった。

僅かに死を逃れた人達はただ茫然、涙もなく胸に去来するものは偉大なる自然の力、余りにも小さな人生の無情の感情だけである。一瞬の災害に対する人の力の程を知らしめた地震であった。

## 福井震災について

清水町 河村 庄右衛門

地震の時には農場に勤めていましたから、災害対策本部等の仕事に直接携わっていなかったので報告出来るような体験談はありません。が、焚出しについて一言だけ。

父が福井に勤めて居ましたので、その職場の方に焚出しをしました。

その道中。木田町を通りましたが被害が大きく容易に通れず時間を費やしたことを思い出しましたが、その被害状況は詳しく申せません。

焚出しの届先について、職員の避難場所があつたの辺りにあるとのことだけで、確たる場所が分からず捜し当てるのに苦労しました。

地区別にでも予め場所が指定してあれば、あんなには苦労をしなかったのにと思いました。

## 福井地震体験等について

勝山市 木下 繁

当時の勤務先…県庁農林部林務課 森林施業計画係 次席（当時算暦38才）

震災当日私は同係の富田技師と坂井郡細呂木村役場に出張していたが、地震で役場倒壊し、草履ばきで国鉄、京福丸岡線を夜を徹して歩き、金津駅、丸岡町の火災を見ながら永平寺町東古市駅にたどりつき、翌朝の一番電車で帰宅した。

県庁では直ちに対策本部が設置され、林務課は林産物、特に復旧木材の供給に全力をそそいだ。私は小浜市の木材組合長の杉田さんと長野県庁におもむき、復旧木材の移出をお願いし、具体的には福井県木材組合連合会と話し合いをするようお願いした。

後日、カラマツ材の移入もあり、くるいの苦情も若干聞いたものである。

倒壊、火災家屋の新設、その他諸施設の復旧には、言語に絶する御苦勞があったのであるが、具体的な事については、私として残念ながら記憶記載がない。

【今後の教訓】 ・火災発生の即時防止（各家庭）

・生活必需品の準備置き持出し

・耐震建築と補強再建築

## 下校途中に遭遇した激震

大野市 起橋 英子

当時、中学1年生だった私には、地球が怒り出したのかと思われるような何がなんだか分からなかった地震だ。

下校中、塀の陰に見えなくなった2階建ての官舎、体が入ってしまいそうな地割れをした道路、短いけれど鉄筋の橋が崩れ落ちているところを恐る恐る通って我が家に向かう。

藁葺きの隣の家が全部つぶれて、中に赤ちゃんが下敷きになったそう。私の家は建てかえて10年目にして遭遇したわけだが、張り出して建てられていた台所部分がつぶれていた。作業場のコンクリートは台所やつぶれた隣の家の方向に、巾20センチほどの地割れをしてつづいている。

その日は、余震の間に、煙り出しから入って、出してきたゴミ混りの籠に入っていたご飯と外に干してあったわかめをいただき、家で作っていたむしろと家から引っ張り出したふとんを敷き、柿の木の下にかやを張って寝た。

二度と遭遇したくない。

## 福井震災に遭遇して

小浜市 木橋 肇

その時私は、小浜の実家に帰っていた。小浜でも揺れは、相当ひどかった。我が家はもちろんのこと、近所のガラス戸が5センチ程開いたりしまったりしていた。防火用水が水槽からざあざあとおふれでていた。

私は、県庁に奉職していなかった。三方郡の神子漁業会に勤めていたのでした。たまたま福井に出張中の出来事であった。同僚の〇〇君は、もう一泊して国際会館で映画『愛染かつら』が上映されてるので見て帰ろうと盛んに推めるのですが、虫の知らせか、私はその誘いを振り切って小浜に帰ったのでした。

私は、翌日神子に帰った漁連の命により、救援物資を積んで福井に行くことになった。道中国道8号線のみが唯一の通行できる道路であった。怪我人を運ぶ車が優先して通すように配慮しながら行くのだから大変であった。

福井の市街地に近づくと従って被害の程度がすごくなり、家は潰れているが二階は残っているのがあった。ブロック屏や土壁の屏の倒れたところに花が飾ってあるので、そこで亡くなった人がいたのだとすぐ分かった。

救援物資はとりあえず御本城橋を渡ったところの石垣のそばで受付を済ませて、国際会館付近の整理にいった。ここは多くの犠牲者を出したところであり、人骨の山が入り口近くに集中していた。女性のヒールの靴があたかも牛の角の様に見えた。一人のお坊さんが読経を挙げていた。私は、前に申しあげましたが、もしも残って『愛染かつら』を観賞していたらと思うと……つい合掌することを選んでしまうのでした。

短い文章で何にも書くことができませんでしたが、いつくるか分からない災害に備えて訓練と日頃の心の準備がいかに大切かを知ることができた体験であった。

# 福井烈震体験記

福井市 木村 慶一

## 1. 大地震で生残り

1948（昭和23）年6月28日（月）の午後5時14分（夏時間）のことである。当時、私は戦後の学区制による第一高校（現藤島高）の1年生で汽車（現JR）で福井・丸岡間を通学し、授業を終え帰宅していた。特に蒸し暑い梅雨の一日で、窓から涼気を入れながら、学期末試験の前で代数学の宿題を勉強中、突然「ドーン・ゴー」という地鳴りの後、激しい上下動の後、水平動が続き、この世の終りを思わせる大激動が襲った。

何事か？分からないままに、机の上のノートを開いたまま椅子を蹴って、一階へ急いだ。階段は自由がきかず振り落とされ、木工所の仕事場で家屋が倒壊、アツという間に下敷きとなり気を失った。地響きと揺れが続き、我に返り、土壁の「ほこり」のあい間に外明かりをたよりに床をはって外へ出た。奇跡的に、命が助かったことに、体の震えがしばらく止まらなかった。木工の機械に柱が寄りかかり、ペシャンコ倒壊を免れたのだ。

## 2. 生命救助にも一役

余震が止まらず、各地で地割れが続き、我家の畑にも地震による地下の泥水があふれ、地獄谷の形相であった。火災も周辺市町村で発生。夜になると火柱が明るく、炎が天を焦し、夜を徹して燃え続け、翌日も延焼していった。町内3軒目の家の女子が逃げる途中、玄関の下にとじこめられ、息も絶え絶えでもがいているのを知り、町内の人と瓦をはずし野地板をばらし、ノコギリでタルキ、桁を切断、ようやく助けだし命をとりとめた。道具や人の集まりがままならず気ばかりあせったが、火災にもならず、近所の人々と人命救助の喜びをわかしあった。

## 3. 辛苦の地震後の闘い

当時、自宅は丸岡駅前（現坂井町宮領）で木造2階建、1階は半分木工所と住宅、2階に和室と物置があり、その和室が勉強部屋であった。裏に畑があり、戦後の物不足の時期で野菜を自給自足で作っていた。家族は父母兄弟の8人、全員無事を喜び合い、畑で青天井の一夜を明かした。

翌日には、畑の一部に雑材を利用して応急バラックを建て仮住いとしたが、板屋根がお粗末、梅雨の時期で雨漏りがして体の暖まることがなかった。地下水が吹上げて井戸がにごり、遠くまでもらい水、河水で行水、大家族で食糧難と生地獄の毎日が続いた。そして旧盆近く、一番下の弟が栄養失調で医療施設もなく、満1才の誕生日を迎えることなく他界。家族にも犠牲者が出たが法事も出来ない最悪の日もあった。

#### 4. 家族で自主再建

父親と共に倒壊した家屋の解体作業に入り、痛みの少ない2階部分を解体、つぶれた1階部分を切断し不要の材木を処分した。屋根瓦を一枚一枚はずす折、当時坂井平野は広々と見通しが良く、余震が大波のごとくうねり迫ってくる様が目で見えた。「今くるぞ!」と何回も屋根の上で必死に瓦にしがみつき、振り落とされることに耐えた。1ヶ月余りの後、基礎の石積はそのまま使用し2階部分を1階に建てかえて、平屋建の狭いながらも我家が復興できた。やればできるんだという事を家族で喜びあった。

#### 5. 徒歩通学・丸岡一福井間

交通機関もズタズタに破壊され、出勤・登校が始まったが徒歩しかなかった。朝出て、不通の国鉄線路伝いに春江・森田を経て応急工事の九頭竜鉄橋をコワゴワ渡り、昼近く学校へついた。第一高校も全壊、授業もなく友人と元気を喜びあい、雑片付けを手伝い早めに帰路につく日がしばらく続いた。幾久の陸橋近くの道路の大亀裂が今でも忘れられない。

#### 6. 福井駅前にバラック復興

進駐軍始め国や各種団体の応援が相次いで、徐々に道路・送電・通信・食糧等が復旧、増援され、市街地も落ちつきが見られるようになった。国鉄も1ヶ月を経て再開され、福井駅からバラック校舎の通学も始まった。駅前通りはガレキの山も取除かれ、バラック建築だが本屋、薬屋、日用雑貨店等が道路沿いに建ち並んだ。しかし、裏通りには倒壊のままの家屋や火事で焼けた跡が残り、倒壊した福屋ビル（原因はあとで構造力学を学び判った）もしばらく名物として残った。県庁お堀の石垣も崩れ、県民生活優先で随分と永く放置された。

#### 7. 烈震（震度7）の教訓

- ・福井地震の前に、東海地方を震源とした地震が多発していた。最大の地震で命拾いをして、震源地はどこだ？被害はもっと大きいぞ？と、まさか自分の地が震源だとは信じなかった。この経験のおかげで「自分は安全だ」との甘い心構えは持たなくなった。
- ・今日、生活が豊かになりボランティアの時代が来たが、当時の県民は他力本願の時代を知らず自力で救助、自主で再建するのが当然だと汗と涙を流した。そして、その力強い不屈不倒の根性で、更に他人の辛苦に惜しまず手をさしのべる事を学んだ。
- ・地震で一度死んだ私は、お陰様で迷わず建築科に進学し、今日、建築設計界に専念し安全で生活し易い建物造りに邁進している。今後も、基礎を丈夫に耐力壁（筋交）のある耐震建物計画の相談にのり、そして経験から地震に合った時には1階に居た人は外へ、2階以上に居た人はそのまま体を伏せて揺れを待つゆとりを持つこと等を説き続けて生きたい。

# 福井震災について

福井市 木村 昇

私一小学生時代にも、入浴中に地震が起き、裸で家外に飛び出た事がありますが、大人になって逢った福井大地震は忘れられない。あれ地鳴りと？—今の、テレビ、映画等でも現わせないとします。

当時、私は中央1丁目14柴田神社北側の通りの古着店に所用で来店中の事で、道の前は旧裁判所が有りました。天候は曇りで、西空はナマリ色、雲間に夕日がのぞく。あのような天候が異変の前ぶれ？

グオーと鳴り、地中がピリピリとわずかに動き、ガタガタグラグラどんと、うなると同時に、道路に20、30のキレツが出来た。幸い、平屋バラック建ちゆえ店は倒壊せず、私達は無事でしたが、店番をしていた夫人は妊娠8、9ヶ月で、吃驚して早産する？と心配するも異常なく、全ておさまったので、私の居候先（照手2丁目2-25）義兄宅が気に入り、自転車を押し帰途に。

今の北陸BK跡（中央1-14）に、大和ビル（ハーモニカビル）が電車道側に前向きに‘くの字’に傾いていたので注意した。順化町の木造家は倒半壊しており道を選びながら片町通り、順化2丁目に。国際劇場は半壊し、入口付近に煙りが出ている。後で知る、犠牲者多き事を。

やっと、照手の義兄宅に。2階建てが1階に成り？照手公園から「昇さんここや」と、ふりむくと姉兄子供達、全員無事避難しておりました。1階に皆おったはず。半壊するまでで1、2、3分の時間あったと思う。

1. 天変地異は何等かの前ぶれあり。
2. 寸時の吃驚では早産せず。
3. 倒半壊は1、2分の時あり。
4. 2階に居たら、1階へ下りない。
5. 総て火元を消せ。

## 福井震災について

福井市 栗原 正

友人と2人で大阪から敦賀駅に着き、余りの暑さに駅前の飲食店でカキ氷を喉に流し込んでいた午後5時過ぎ、突然の大揺れに驚いて外に飛び出した。福井の大災害も知らず、小浜線で自宅の三方へ帰った。ラジオで大きな被害を聞き、家の前から北の空を見ると無気味に赤く染っていた。夜9時前の列車まで待てず、勤務が敦賀にある県二州地方事務所まで約25キロの砂利道を自転車で走った。

懸命に集められた救援物資を翌朝トラックに満載し、同僚と荷物の上に乗し、変り果てた福井市の県庁本部にようやく辿り着いた。当時、国道は路巾狭く、砂利道で救援車等自動車の通行が多く、片道4時間以上も要した。

また、管内の役場を通して編成した災害復旧協力隊約100人を、敦賀港より三国港まで舢舨2隻に分乗、漁船に曳航させて輸送に当たったが、大震災時の陸路、海路の交通確保には万全の体制づくりが必要と痛感した。

## 福井震災50年に思う

三方町 小西 徳次郎

19才の11月に復員してまだ日も浅く、世の中も完全に落ち着いたとは言えない時代、そしておいそれと職業もないし、これから先、私達次男坊はどうしたもんかと迷っていた時代。そんな或る日の夕方、グラグラと家が揺れました。中に居られなくて外に飛び出しました。隣りからも、近所の人々も皆んな出てきました。

今の時代のように、テレビはもちろんのこと、電話も村にはありません。翌日の新聞で、福井大地震を知りましたが、その時は、くわしい被害はまだ判明しませんでした。

それから何日かして、役場から救援隊の出動を要請されました。今で言うボランティアでしょうか。今年の春は、重油の被害でボランティアの方々に大変な御世話になりましたが、たまたま当時の事を思い出しました。集落の戸数は42戸ですが、当時青年団員は30名いました。それを2班に分けて各集落から出ましたので、相当な人数になりました。私達は先発で、まず敦賀まで汽車、そこから先は汽車もトラックも通れません。敦賀港から機帆船で、三国港に渡る事になりました。諸物資の輸送は、機帆船で海上輸送が主の時代、どうにか帆が焼玉エンジンに替わった程度でした。形は昔の北前船そのもので、百石積み二百石積みの船が主流でした。

三国港に上陸したその日は、三国小学校の講堂で寝ることになりました。地元の婦人会のおばさん方が、私達の持参した米でオニギリを作って下さいました。総勢50名程いたでしょうか、暑い日でした。板張りの上にゴザ1枚、カの大群に襲われて寝付かれません。朝まで一睡も出来ませんでした。

作業は足羽川の堤防の決壊した個所に土のうを積んで、梅雨期の増水で二次災害を防止するのが目的ですが、真夏のような暑い日照りでした。終日、土のう作りに精を出して帰っても、風呂もありません。三国の浜で海水浴をして汗を流したものの、又、あのカに攻められるのかと思うと悲しくなりました。

トラックでの往復の道すがら、坂井町の町並みも春江町も全滅状態。ほとんどの家は木造瓦ブキの二階建て、それが一階がつぶれて二階だけがきれいに残っていました。福井市内の大和百貨店の倒れかかった姿が今も印象的です。

今日のようにテレビで報道されるでなく、神戸のように家が密集していたら、それ以上の被害だったように思います。

若さの強みと申しますか、戦中を生きた者は誰でもそうですが、忍耐がありました。そんな状況の中で2日間の作業を終えて、2班組と交替しました。

もう50年と、振り返ると夢のようです。それからは、自らの生活と子育てに追われましたが、日本の再出発の時代だったようにも思いますし、私自身の人生の再出発の時だったかも知れません。不死鳥福井とよく言われましたが、私達の人生の中で、戦争と物の無い時代は青春時代と忍耐の時代だったように思います。

## 福井震災の教訓について

福井市 斉藤 庄右エ門

私は帰途の車中で地震にあった。電車が横揺れした瞬間、電線が唸り、鳥は落下、大きな倉庫が砂煙をあげて潰れ「アッ地震だ」と感じた時、電車は横倒しとなり修羅場と化した。

私は知人を救出し無我夢中で走り帰った。集落にたどりつくると道路には潰れた家屋で通れず空地を伝って家に着いたが、無残にも我家も倒壊していた。

その時、「皆んな道具を持って集まれ」と声をかけられ、鋸と鉄槌を持って駆け着けた。区長から、「生存者を確認の上、若い男は3班に別れ下敷きになった人の救出にあたれ、女は怪我人の手当と炊き出しの準備をしろ」と命ぜられ、皆が部署につこうとした折り、南の方から白い煙りがあがり「火事だ」と告げられ、一転、男はバケツを持って火場に急げの号令のもと

必死で消火にあたり火を消し止めた。続いて救出作戦に当たったが、余震に悩まされ、長い人は三日三晩もかかって助け出された。

混乱の中、統一した行動が出来たのは戦時中の軍事教練の賜物と思うが、その考えは古いのだろうか。

## 福井大震災を身近に体験して

武生市 齊藤 昭三

震災当時、福井県農業会 技手。

今から丁度50年前、昭和23年6月28日午後5時14分（当時はサマータイム）、初夏の太陽がけだるく輝き、何となく息苦しいような一日であった。

県庁前にあった福井県農業会へ就職して、2年目を迎えた私は一日の勤務を終えて、帰宅のため福井駅ホームで5時18分頃発の汽車待ちをしていた。

突然雷のような地鳴りと共に、足元をさらわれ無意識にレールの上へ飛び降りた。

辺り一面、土埃で煙幕のようになった。女性のするどい悲鳴、怒声、ホーム武生寄りの檜の上にあった大きな水槽が地上に落下した。辺りの建物が一瞬にして倒壊して、人々はただ右往左往して、喚き叫んでいる。ようやく大地震が発生した事を知った。

私達の乗る列車は駅の手前で転覆したらしい。私は、偶然駅で一緒になった武生の用田さん、田中さんと3人で国道を歩いて帰る事に決め、駅前を出た。丸福マーケット前では、アンモニア液が流出して、目もあけられないように臭かった。家の下敷きになって、手足をばたつかせて助けを求めている者、商店のウインドウから時計、ネクタイ等の商品が道路に散乱しているが、そんなものには目もくれず、ただ一刻も早く武生の家へ帰る事しか考えていない。幸橋の所まで来たら橋南に火災が発生して、消防車が橋のたもとと道路との段差で渡れずにもがいている。見る見るうちに福井製練方面が火の海となった。

武生方面より福井市内へ急ぐ人や車のため、歩行が出来ないので、花堂より国鉄線路沿いに大土呂駅に向い、折り返し武生方面へ汽車が出るとの事で長い時間を待って、ようやく9時過ぎに武生に着いた。鯖江、武生は全く被害がないので一安心、それでも武生駅前には人が沢山外に出ている。余震を心配して家へ入れないとの事であった。

私達の福井県農業会も、大金庫を残して全焼し、しばらくは手のつけようもなかった。私達被災していない者は応急的な後片付けに従事した後、県連合青年団長笠原武氏の指揮のもと、我々武生市青年団は、最も被害の大きかった丸岡町の応援に行った。

水脹れになって溝に浮いている死体、建物の下になって圧死しているもの。街角で偶然同じ職場の林田先輩に会った。今やっと建物の下敷きになっていた奥さんの死体が、発見されたことで青ざめた顔をして、煙草が一本ほしいとのこと。荒むしろをかけ、手足をぶらぶらさせながら運ばれていく姿が目には焼き付いている。

丸岡高等女学校は焼けてはいないが、相当の生徒が下敷きになって圧死していた。その後私は職場に戻り、農地農業用施設の被害状況調査に出動した。私は吉田郡担当で、全被害地をくまなく調査した。橋梁、道路、頭首工、農業倉庫、用排水路の被害は言語に絶するものがあり、30センチメートル位に生長した苗が泥をかぶり無残に潰滅している。この状況を写真と共に報告書とし、今後の復旧対策を協議検討したのである。

ちなみにこの地震による死者、行方不明者は3,858人、全壊焼失家屋37,644戸と発表された。坂井郡を中心に、福井市、吉田郡、足羽郡、更に丹生郡、今立郡の一部に未曾有の大被害を及ぼしたのである。

「災害は忘れた頃にやってくる」福井大震災50周年を顧みて、この事を強く再認識されまして、災害対策を怠らないように普段から緊急時に備えておきましょう。

## 地震体験談

福井市 酒井政市

地震の日、その時はサマータイム制でしたので、家に戻った時も十分に明るかった。玄関口に立った時、大きな音と共に激しい揺れを感じ、すぐに道路に飛び出し、そのまま道の中央に立ち周辺の状況を眺め危険のないようにしていた。そして、自分の家を見ると、丁度、スローモーションの画面のように静かに、何の音も聞えず崩れゆくのだった。

激しい揺れが落ち着きほっとしていた時、「大名町、片町付近で火災が発生し延焼の恐れあり」との情報が入り、私は空襲の体験から、バケツを持って現在の三井生命ビル辺りまで行ったが、当時まだ戦災の影響もありあちこちに空地があり、家も崩れており見通し良く、火煙は遠く、人々の集まりもなくほっとした。現在と違い、その当時小さな川が市内どこでも見られたが、今は殆ど見当らない。

今後の課題としては、正確な情報の速やかな伝達と水の確保ではないかと思う。私は当時若かったこともあり、空襲の時も地震の時も慌てているだけでどうしようもなかったが、死の恐怖は全く感じなかった。

# 福井大震災の思い出

鯖江市 酒井 千ヨエ

昭和23年6月28日、福井に大地震が起こった。当時私は19才、50年前の事になります。福井市本町の洋裁研究所へ通っておりました。そろそろ帰り支度をしかけていた頃、グラグラと揺れ出し大きく揺れた。これは大変と思い、洋裁台の下に潜ろうとしましたが、何人も入れないので素足で裏庭に出たが、とても立って歩けるものではない。這いずりながら、コンクリートの古井戸（昔は水が出ておったが、随分以前から水が出なくなり枯れ井戸になっていました）の淵につかまった。すると次の揺れの瞬間、井戸の中からゴーツと大量の水が湧き出て、慌てて這いずりながら、他の場所で伏せて揺れの止むのを待った。少し、揺れの間隔が長くなりましたので、素足のまま家に帰る事にしました。我が家は、足羽川の大橋を渡り、藤島社の前通りから中野本山の裏にありました。

本町通りを通り大橋へ行くまでが、なかなかでした。商店のビルは壊れてくるし、その砂煙で目があけられない位。怪我をして血みどろの人が気が狂って道に座りこむ人。ようやく大橋にたどりつくと、一列に並んで長い列です。お巡さんが一列で橋を渡らせておられるんです。橋の上での災害に備えてでしょう。

ようやく家につきましたが、もう九分通り壊れていて、中には入れない状態。中野本山の横の大きな建物が土煙をあげて、くずれ倒れてきました。日赤が近いと言う事もあり、怪我人を自転車に乗せて運ぶ人、死人を自転車に乗せ前と後で押して行く人、死んだ人を戸板に乗せて運ぶ人、もう慌ただしい夜でした。余震も引き続き、近所の家もほとんど全壊、手のつけようありませんでした。二階建てが平屋になって一部助かった家もありました。

私達、近所の方は、中野本山のお墓とお墓の間で休む事にしましたが、福井市街の空が火災で真赤です。福井大空襲の空を思い出し、余震に怯えながら夜を明かしました。翌朝は、くすぶる道を辿りながら父の母をハッ島に尋ねたところ、すでに家の下敷になって亡くなり、田圃の一角で亡くなられた方達を次々と火葬にしていました。ハッ島へ行く途中、毛矢町の市内電車の線路等は浮き上って曲がり、道路は亀裂が入り、どこが道路かさえ分からなかったのを記憶しております。駅前人絹会館の上階の窓から炎が吹き出し、一夜たっても消えずに燃え続けていました。あの頃は、まだ都市ガスは無く、石油コンロで煮炊きをしていました。御飯だけは薪で炊いていた様に思います。ところが、水道は出ない、電気もなし、昼は少しでも後片付け、暗くなると寝る……。

でも幸いな事に、大和紡績の一箇所まで自家発電で水を出して下さる事になり、皆さん一斉にバケツやヤカン等持って行列を作りました。3時間位は並びました。夜8時から11時頃やっと、

水をいただいて帰りました。朝になると、トラックでおにぎりの配給がありました。

とにかく洗濯するにも水がない。お米をといで、その水は翌朝の洗顔用に残したものです。それからお隣さんと協同で小さい池を掘りました。とても呑めませんが、洗濯や行水等に使えましたので助かりました。とにかく、店にローソクや缶詰等は一切手に入らず、親類や知人からの差し入れが、本当に有り難く拝みながらいただきました。

福井の駅前には、早々と小さい仮小屋で日用品等店を出していましたが、物価が高くて、とても手が出なかったものです。

仮設住宅も千戸くらい出来たそうですけど、私等は全く知りませんでした。公営住宅で仮住いという言葉さえ知りません。一部、その様な施設を利用されたのかもしれませんが。

とにかく、不意の災害に備えて、日頃から最小限の食糧・水・衣類・応急用品等の準備についての各区地区からの資料は良く読み聞きして、ぜひとも備えて置くべきと思います。

福井の震災、阪神の震災も共に火事を起した事が残念でした。

自分の街は自分達の手で守りたいものです。

## 福井震災の教訓から

鯖江市 佐々木 きよ子

福井震災より50年、私はその日の事を思う毎に胸がいたみます。それは多くの方が火災のために全身火傷に苦しみ、治療のすべもなく、家族の安否を気づかいながら死なれた事です。私はそうした人々に、ただ「頑張って下さい。今、家族の人に連絡に行っていますから」とやさしく慰めつづけていました。余りも重症火傷のために身体にさわってあげる事も出来ませんでした。そうした状況はこの世の生地獄でありました。

火災が起きなかったら、この様な多くの犠牲者は出なかったと思います。今は、電気石油ストーブには耐震装置があり動くとも自然消火しますが、ガスレンジにはついていません。火をつけたらその近くで行動し、地震の時すぐ消し元栓をしめると言う習慣づけが大切だと思います。何時、地震が起きても冷静に行動できる様に、日頃から家族全員に徹底しておく必要があるのではないのでしょうか。

## 福井震災の体験

三国町 笹本 正治

震災時は福井市内勝見に在住。

勤務が終わり帰途、市営球場前まで来たところ、突然道路が上下左右に。前方を走っていたダットサンがバタバタ跳びはね進まず、お苛しいと感じる間に私自身四ツ這い、直ぐ立つ事が出来ず。「あっ地震」と思い四方を見ると、眼に入ったのは、今まで建っていた家や総ての物が一瞬の中に倒壊ペシャンコ。一面濛々と土煙。そして人々の叫ぶ声、戸惑う姿、正に此の世の生地獄。

その後、どうにか「城の橋」に。しかし、兩岸の取付部分がポツカリ開き、落下寸前。どうにか渡り家へ、しかし半壊。家族近所の人々も恐怖でただ茫然、お互い無事を確かめるのみ。

一方、市内は濛々たる土煙とあちこち火煙が立ち広がっていく。

人々は余震と食住、そして知人の安否を気にし、「福井でこの被害、東京、大阪等では」とか、種々のデマや臆測が飛び、毎日が不安の日々であった。

体験から思うに、少しでも早く確実な情報伝達を。災害にあった際、自分で身や家族を守るため、携帯ラジオ、食糧、水等応急用防災用品を常時備えて置くべきだと痛感した。

## 福井震災について

鯖江市 定政 清治郎

福井県福井震災対策本部に勤務。

福井大震災の発生時、私は県庁本館3階で勤務中で「ゴー」という音と突然の激しい揺れに、あっと言う間に床に転んでいた。

その時、6尺の二段重ねの書棚の下段が前に倒れ、その上に上段の棚がそのまま立つという、誠に珍しいことが起きた。

転びながら外に出ようと階段の所まで来ると、人が階段の中程で逆倒しとなっていた。ようやく福井城壁に辿り着いたときの展望は、7階建の大和百貨店が傾斜し、佐佳枝中町付近からドラムカンが火を吹きながら百メートルも飛び上がり、まもなく各所から火の手が上がるという状況であった。

全くの通信不能状態で被害状況の把握が出来ず、北副知事の命を受けた在庁職員が二名一組となって地方に派遣された。私は、社村役場へ派遣されたが、木田四辻から南の国道は倒壊家

屋の屋根の上を歩き、帰宅したのは午後10時頃であった。その頃は消火の方法もなく市街は火の海と化し、逃げ惑う市民は凄惨そのもので、翌日の朝には焼け野原となっていました。翌日(29日)には森田方面の調査に派遣されたが、芦原温泉街には火災がなく称賛されたところがありました。

## 地震体験談

朝日町 早苗 一雄

昭和23年震災当時、夏時間を実施しており、小生、帰宅するため福武線鳥羽鉄橋(浅水川)の手前三十八社駅寄り第二鉄橋(小さい)で電車が降り、何かと思い車中より横の田を見れば、中央より水が吹き上げておった。これは大変な地震と思い、徒歩にて帰宅した。早速、握飯を作らせ、県庁と連絡のとれないまま自転車にて三方村(清水町)を経て山奥村に入ったが、家が全壊して道路に倒れ通行不能であったので、徒歩にて県庁についた。

当時、小生は県総務部調査課に勤務(課分掌事務は統計、監査委員事務)国勢調査を担当していた。県は対策本部を設け、調査課は被害個所の写真を撮るよう指示された。小生班は丸岡春江方面に向ったが、中角鉄橋は落下しており道路は通行不能であった。三日間ほどと思うが行動した。

これより先に、GHQ(ハイランド司令官)より県に対し、「潰れた家屋を取除き道路を確保せよ。」と厳命が達せられた。

2週間ほどして通常の仕事となったが、10月1日現在、国勢調査・事業所統計調査は困難と思われた。吉野課長、川端補佐は小生に、「上京し総理府統計局へこの旨を報告し延期方を申出をせよ。」とのことであった。しかし、統計局とGHQ担当ストーン女史(少佐担当官)と打合せの結果、「一県のため延期できない。数字に多少誤差があってもしかたがないから実施せよ。」と命令された。1ヶ月後、ストーン女史統計局2名が市町村の現況を調査に来県し、終了後、自動車にて帰京した。

その後、調査準備を行い10月1日を迎え、5日後より市町村から集計表の提出があり、点検と県集計、そして統計局への指定期日までの報告(持参)の繰り返しであった(県集計20種程)。

点検と集計には当時168市町村あったと思う。これを行う事務執行に別室に寝泊りして行わなければならない。最終は12月末で終わった。

# 福井大震災について

福井市 柴田 真哉

## 1. 被害状況について

- (1) 家全壊（茅葺屋根）、倉全壊。
- (2) 井戸水出なくなった。
- (3) 屋敷内に巾1メートル東西に地割れ、タンス引出しその中に落下、重要書類在中。
- (4) 墓全倒。火葬場全壊。
- (5) 町内神社拝殿、神殿全壊。鳥居全倒。
- (6) 町内集会所全壊。
- (7) はだしで飛び出し、タンス角釘、足に刺さる。

## 2. 復旧に係る苦勞

- (1) 震災から3日間、県道上に蚊帳を張り寝る。
- (2) 横の県道上に倉倒れ、震災数日後、速かに取除きを要求。人手なく、応援なし。
- (3) 30戸の集落中、29戸の井戸が止り、1戸だけ井戸出る。生活水の貫水生活は1列にならんで数ヶ月におよんだ。

## 3. 教 訓

- (1) 水対策どうする。消火水、生活用水。
- (2) 傷害時の救急箱の常時保存。

# 県庁舎の震災による被害状況について

福井市 清水 清七

当時の勤務先…県営繕課

県庁舎は大正10年に建築された物で、鉄筋造りの本館、議事堂、倉庫、木造の別館、附属建物を含め、面積延1万1千平方メートルありました。昭和20年の空爆により本館議事堂は屋根部分木造のため燃え、内部も一部焼害をうけた。木造建物は全棟焼失した。鉄筋部を屋根築造鉄板ぶき、内部も全面応急改装、別館も新築、不足部を増築予定中に、次の試練、福井大震災が起り、次の被害を受けた。

木造部は全部倒壊解体改築を要し、鉄筋本館は階段室東西2ヶ所大破により解体の上、階段共、新しく改築を要し、鉄筋部分の接続取合部亀裂脱落、鉄筋の伸び曲がり等補強改修を要す

るもの30ヶ所余り。床全面不動沈下が高低差35センチの為、取り除き、張り替えを要する。鉄筋造りの煙突大破折損により取りこわし撤去要する。

以上の被害状況に驚き困惑した後、まずは仮設建物の造成を西側空地に始めた。

又、建設省研究所より災害調査員が来福し、私が案内人として被災部を調査した上、補強方法等を協議した。復旧工事は主任として設計監理にあたり、若い係員の助力をうけ、昼夜をとわず休日も返上だった。又、愛知県営繕技師が応援にきて下さり、別館の設計や藤島高校の仮設等に助力をたまわった。これは昭和18年の名古屋の地震の折、本県の中学生が勤労働員で軍需工場にいて被災した時、私達3人、こちらからかけつけ助力した返礼であった。

その後、県庁舎のみでなく、福井市を中心にあっちこっちの災害地の破損復旧の予算書と国庫補助申請の為の資料作成等に忙殺された。

震災当日、私は、三国町の引揚者収容の仮設宿舍の竣工検査の検査員として出向いていました。福井に帰ろうとしましたが、竹田川の橋が中間より折れ落ちていたので、泳いで渡り、線路を歩いたり鉄橋を腹ばいになって渡り、帰りつくと自宅は全壊。家族は死亡したと思っていたのが、相方とも無事であり喜び合いました。夜は空地で野宿し、朝早く県庁にかけた次第です。

今は、その時の若さとその力をぶつけた昔の自分の良い思い出です。

## 福井大震災について

永平寺町 鈴木 秀 緒

### 1 被害状況について（公共土木のみ）

道	路	357ヶ所	162,319,738円
橋	梁	97ヶ所	171,217,031円
河	川	121ヶ所	1,136,616,211円
砂	防	1ヶ所	814,266円
	計	576ヶ所	1,470,967,246円
外に市町工事		222ヶ所	68,146,514円
合	計	798ヶ所	1,539,113,760円

\*当時と現在の物価上昇率で換算すれば大変な数字となる。

### 2 災害復旧に係る苦勞について

- ・職員自身も被災していたら、家庭を顧みず、不眠不休の勤務をしなければならない事

### 3 福井震災の教訓について

- ・福井震災ばかりでなく阪神・淡路大震災の教訓を生かした橋脚の補強や落橋防止の対策が取られつつある。
- ・山麓の急斜傾地付近は宅地開発行為をさせない。
- ・人家連たん地域は四車線が必要。

## 調査記録の重要性とその実践

福井市 高島 義雄

私は地震のとき県庁調査課にいた。災害救助隊が発動したとはいえ、県庁職員の出勤者が少ない。市内および近郊地の者は被災者であり、九頭竜川の橋が全部落ち通れるのは五松橋だけという有りさまで、坂井郡方面の者は皆無という状況だ。

先ず、調査記録班を作り、調査課員数名のほか他課の応援を得て、十名程度で調査方面隊を組織した。方面隊に1～2名を配置、これを主軸に現地の写真撮影、記録を目と足で書くよう指示した。鯖江、武生更に敦賀にも飛び、写真屋さんを集め拜む頼むの戦略で了解を得た。オート三輪、油、フィルムなど諸機材は無いはずだけに、他の部署と連携を取り、どうにか動けるようにしたが、民間の方が多しただけに金の問題が難点となる。そこで県庁に集まってもらい、財政課主任（現在の課長補佐）から、①金は心配するな②県が責任を持つ③調査班長の指揮下で仕事をされたい、と発言されたので、どうにか動き出した。

市内はもちろん、足羽・吉田・坂井へと方面隊を派遣した。手弁当の日帰りであった。各隊は十数日余りご苦勞を願った。私は坂井郡を担当したが、なにぶん、松岡から五領ヶ島に通ずる五松橋しか通れないので、交通量の制限など夜遅くなること、しばしばだ。

班員は総合的調整、企画等の業務があるので、夜は県庁の部屋に机を寄せ集め、毛布で泊り込んだ。食事は各自が軍隊用の飯ご炊飯だ。ただ、蚊の襲来には悩まされた。

こうして地震直後の現地取材、記録を終えた頃になって、ようやく県全体の“災害救助隊”も動きはじめ、大きな組織下での運営が活発化されたのである。その後、広範囲な被害状況の収集には、県機関以外の部署については相当に苦勞したものである。

さきに書いたように、地震直後の県職員の出勤の少なさに思いをさせ、いち早く、本庁に出勤出来ない者は、最寄りの出先機関に勤務し、その長の配下につくよう命令したのは適切な処置であったと思う。また、県外からの救援物資は、一応県会議事堂に運ぶよう本部は措置したものの、その容積は余りにも多く、結果として種々雑多になり、有効適切な配分には非常に苦

慮したことを、あえて付記することとする。

## 災害復旧額作成について

春江町 竹内 等

その日は大変嫌らしい蒸し暑い日であった。あまり暑いので涼しくなってから帰るつもりで宿直室で休んでいたら、突然ゴーという音と同時に揺れて、驚いて飛び出し桜の木につかがっていたが、今にも事務所が倒れるようで気が気でなかった。

余震も落ち着いたので、帰るため自転車で川崎部落を過ぎ、少し行くと堤防に亀裂があり。渡ろうとしたら当時の五十嵐木部村長が通り、各部落の家屋は全部倒壊している大変な事になったと言われ、別れて家へ帰るとやっぱり倒壊していた。

翌日から復旧額の調査をしなければならなかったが現地調査の時間もなく、どうしてよいか分からなかった。日時が過ぎると被害額も分かってきた。又、救援物資が三国港に入るようになると、丸岡町にある対策本部へ輸送するため、物資の落下と盗難防止のためトラックの上乗りの仕事が続き、夜になると被害額の調書作成にかかりきりになった。疲れがあり何回算盤をしても合わず苦勞したものである。

## 震災体験談

春江町 竹下 スギオ

福井大震災、風化してならない記録の一頁です。

昭和23年6月28日、蒸し暑い夕刻。ドンドオン。また、空爆と錯覚する瞬間、あっ地震だ。脳裏に閃く<sup>ひらめ</sup>幼児の姿、何処に。無我夢中。揺らぐ家の中、手に触る物に委ね、次の部屋にいた我が子抱いた。と同時に、異様な音と共に我家は崩壊した。

頑丈な食器棚に支えられ、母子抱き合ったまま九死に一生を得た。<sup>たなず</sup>佇みながら黄塵交りの光りをえて、その時早く脱出した。母親の泣き叫ぶ声に出口を見出した。

そこには残らず倒壊した家々。辺りは黄塵で視界黄一色。外に出た私が見たものは、野良仕事から帰りの人々は全身泥だらけ、田圃の中で七転八倒したらしく泣きながら倒壊した家路に急ぐ。まるで地獄絵そのもの。その頃から、あちらこちらから炎が広がり、私達は右往左往。家族を求める泣き声。私達は余震に<sup>おのの</sup>慄きながら、外出中の夫の安否を気遣っていた時、隣家の

道路上に倒れた屋根に顔を出した夫の汚れた姿を見た。感慨深い印象は脳裏から消えることはないでしょう。

## 大震災の応急被害調査に従事して

美浜町 武長 稔

敦賀駅前所在の県二州地方事務所に勤務。

定時退所後の敦賀駅で、発車前の客車が、ぐらぐらと揺れ激震と感ずるも、そのまま帰宅、ラジオで福井地方の震災を知る。わが郷から北の方角に天を焦がす明かりが見えた印象が、今も強く残っている。

所属所へ共同電話で電話するも交信できず、通勤路線（小浜線河原市－敦賀）で登所する。以下「日記」によるも、要所要所が不詳で誠に残念に思うも、調査中は総て自転車であったことと、その後訪れたことがない坂井地方が懐かしく思い出される。

6月28日(月) 午後5時14分 福井地方大地震発生、午後9時登所

6月29日(火) 午前1時 敦賀駅発武生駅下車 武生より徒歩にて福井県庁 夕方帰敦

6月30日(水) 福井行 応急物資をトラックで運搬、作業員

7月3日(土) トラックに便乗、経済課長と共に福井、坂井地方応援隊として、鶉村へ向かう。  
吾ら2人は川西6ヶ村を担当、鶉村役場宿直室（傾斜床）が事務所兼宿舍

7月5日(月) 福井行 災害対策本部へ 道路が寸断され自転車を担ぐところ多し

7月6日(火) 丸岡出張所行 帰途 東十郷村の渡辺所長宅を見舞うも、震源地近くであり、  
竹藪以外すべて倒壊

7月7日(水) 坂井地方事務所へ 帰路 棗、鷹巣村役場巡回

7月10日(土) 調査終了 鶉村役場を離れ帰庁

## 福井震災の教訓等について

武生市 田中 浄鏡

私が地震に遭った所は福井市のど真中、京福電鉄新福井駅と国鉄福井駅の間である。兄と共に突然地面に叩きつけられた。上を見上げた途端、眼前の光景はレンガ造りの倉庫が埃を吐きスローモーションのごとく崩れ落ちた。音がしたか記憶にない。総てが轟音に包まれ耳が反応しなかった。壊れた機械から出るアンモニアガスが鼻をつく。路面は水道管の破裂で泥水が吹き上がる。電線は垂れ下がり感電が脳裏をかすめる。兄の手を握り片手に自転車を担ぎ倒れた屋根づたいに風上に走った。途中何度も女性が助けを求めしがみつく。これを振り払い逃げた。パニックの中では自己中心の行動となり、阻害要因を排除する動物的本能に帰趨する。弱者を護る心は常にあったが、なぜこのような行動をしたのか不思議でならない。どうにか夢中で郊外まで来た。一安心も束の間、余震で路面がビリ々音を出し割目ができる。すぐ塞がる。急に恐怖感に襲われる。

体験から次の防災体制を痛感した。

- 一、市の中心から千メートルの遠隔地に公園を兼ねた避難所の確保及び防災の学習。
- 二、医療対策・通信機器の設置。
- 三、各家庭で家屋からの救出用具として鋸、大型バール、枕木の設置。

## 福井地震について

武生市 谷口 正儀

50年を経過した今思い起こすのは「めちゃくちゃに暑かったなあ」と云うことです。

写真は、同僚福井君と二人、福井県蚕業試験場第二蚕室の倒壊した屋上です。唯一の地震のものです。(座っているのが私です。)

家路を急ぐ勤め人で一杯の国鉄福井駅正面入口で、暑い西日が照りつけるなか、駅前電車通りを眺めていた時の出来事でした。一瞬にして阿鼻叫喚のちまたと化した中、一目散に試験場にとって返したところ、全壊の惨状でした。途中、家屋の下敷きとなり大声で助けを求めている悲鳴に耳をふさぎ走り続けました。



試験場関係者で不幸にも一人の若い講習生の生命が亡くなったことが悲しいことでした。

災害は忘れられた頃にやってくると云いますが、地震から一ヶ月後の7月25日、復旧が緒についたところを水害が追い打ちをかけました。ほんとうに厳しい天の試練だったと思います。

## 福井地震と予震

福井市 谷口 陸男

大地震ではかなり長期にわたって、何十回何百回もの余震というものが付随している。もちろん、福井地震でも余震は何日か続いてあった。が、私は福井地震に限ってかどうかは分からないが、余震でなくて“予震”があったことをはっきり覚えている。前年の11月末頃より、有感と無感（測候所発表）併せて、多い日には十数回、少くとも数回の微震がほとんど毎日ように続いていた。

これを、私はあえて予震と呼ばせて貰うが、これが、あの23年6月28日の福井大地震の前触れであったことを疑わないのである。

阪神・淡路大震災でも、これら予震に当る前触れ微震があったかどうかは知らないが（程度の差こそあろうが予震はあったと聞いている）、今でも国内のあちこちで小規模地震が頻発することがあるが、それが大地震の予震ではないかと気にかかるところである。

大震災被害の悲惨さは語って限りない。地震の揺れがはじまったら、木造家屋の2階に居たら逃げないこと。1階が潰れ、2階が残る公算が極めて高い。平屋建に居たときは逃げない方が安全性は高い。

## 福井震災について

福井市 塚田 義信

1. 昭和19年8月 陸軍招集 満州国境守備隊として渡満
2. 昭和20年8月 終戦 同年10月露軍に抑留  
シベリヤに渡り苦役に従事
- 昭和23年10月 解放され帰途 栄養失調のため自宅療養
3. 昭和23年12月末（年度御用納日） 帰還挨拶のため出県（道路課）
4. この時点では被害道路の応急手当は終了の様子。大きいものは工事中（仮手当）であった

が比較的軽微のものは終了

5. 橋梁等を含む比較的大きいもの、復旧と併せて改良を要するものについては本省との打合せに着手。これ等の件は翌25年度まで特別補助申請を認められた。
6. 震災直後の状況は不詳です。

## 私の体験からのぞむこと

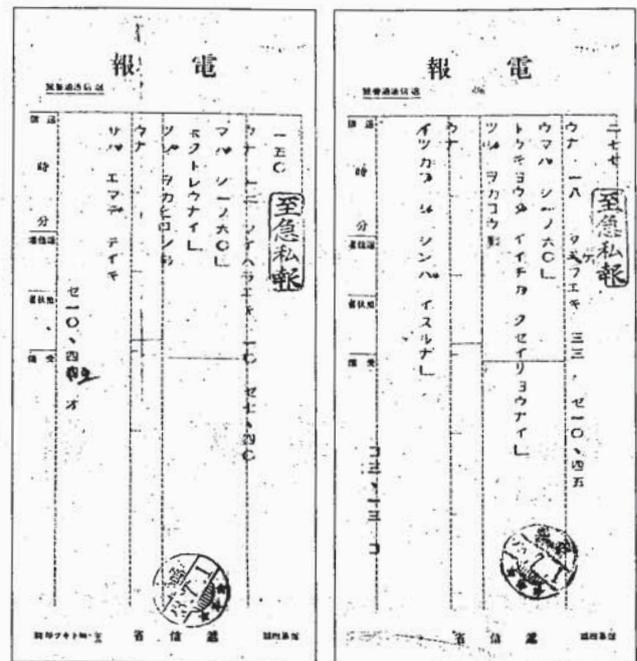
福井市 辻 岡 宏

福井地震発生ときは東京で寮生活の学生でした。寮友と二人で話し合っていた時に、不気味なゆっくりと長く揺れを感じたことは、いまだに忘れることは出来ません。

当時は、現在のように映像で状況を直ちに知る手段もなく、「福井市内の西部で火災が発生しております。」とラジオ放送されるだけで通信網は寸断され、自分から家族の安否さえ確かめることが出来ませんでした。その日の夕食も殆ど口にせず、寮母から「家族の方の何か連絡のあるまであせらず待っていなさい。」との忠告で、何をするすべもなく、いらいら、おどおどと待っていたのを思い出します。

ようやく、7月1日になって兄の武生からの打電で、家族の無事と汽車の運行情況を知り、その日の夜行に乗り、明朝焼失した我が家の前に立つことが出来ました。

現在は、被災地の状況はテレビで放送され直ちに知ることが出来ますが、特に個人の被災状況を知らせることが出来る通信手段の整備を過去の体験からのぞんでいます。



## 火元は大丈夫か！

芦原町 土田 茂一

「地震だ、みんな卓球台の下に入れ」と叫んだ私は十八才で、坂井郡の旧木部村役場に勤めていた時の福井大震災でした。何が起きたか分からないまま気がついた時、卓球台はつぶれ、頭の上に窓ガラスが乗っていた。そこから外に出た時、庁舎がつぶれていた。気を失うとはこのことかと、誰かが、湯沸かしの火は大丈夫かと、そして、自分達の家を心配した。農村ではまだ食事の準備時間でなかったため火災は見られなかったが、町では火災が起き大変だったようだ。

何もかも無くしてしまう大地震の被害は大きく、多くの方から食糧や衣類の義援物資が送られ、本当に有難く思えた。私はその分配係を担当、てきぱきと、村の人達の身になって配分し大変ほめられたことを、今思い出している。

大揺れの地震の後も、壁土の煙を立てながら倒れる家を見ながら、「火は大丈夫かなあ」と心配しながら、自分の家に帰った。私の家は半潰だった。

## 地獄の福井地震

福井市 坪田 潔

県庁林務課で一人残業をしていた。突然ドーンと轟音がして下に落ちた。横ゆれがして机、椅子が波の如く右へ左へと流れた。窓越の外は砂煙が龍巻で暗くなった。地震だと聞き、建物が崩れ下敷きになると思い、廊下に出て倒れた。横ゆれが激しく歩けない。左手を壁伝いにし、ようやく外に出た。

横ゆれは止まった。お濠の石垣の上に昇る。石垣が崩れている。二階から飛び降り怪我をした職員も居る。御本城橋前のコンクリート道路には大きな穴が開いて水と砂が吹き出していた。周囲の家は倒れ、道は車が通れない。遙か西空に一筋の煙が昇っている。

東方の泉田町へ徒歩で帰る。家も潰れ、親戚の祖母は下敷きとなり圧死とのこと、ご冥福をお祈りする。

夜となり福井市の上空は真赤な炎で燃えていた。西風が、遠くの丸岡町新保町に衣類の燃屑が飛散した。青空の下で五右エ門釜の風呂に入り、炊飯をなし、三角の藁葺船頭小屋の生活は続く。合掌。

## 仮橋を渡る

福井市 寺谷 西 男

当時の勤務先…県地方課

突然、ぐらぐらと国鉄（当時）福井駅上り線のホーム全体が大きく揺れた。地震、とっさに線路に飛び降り、暫くして北の方を見ると、貨物車両が全部横倒れになっていた。

大地震に身動きもままならず、とにかく家へと、足羽川鉄橋の枕木を恐る恐る一步一步、歩き線路づたいに南へ。幸い大土呂駅近くに停車中の汽車で鯖江駅まで行き、そこよりさらに歩いて家路についた。

地震直後、本省よりの文書類は、一部森田駅止めで送ってきた。

ある法令に関する文書など荷受のため、家が倒れ瓦礫が散らばっている道路を歩き、ノコギリの刃状に橋桁が落下した九頭竜川舟橋（当時）の下流に応急仮設された幅の狭い水面すれすれの板橋を渡る。森田駅構内に山積みしていた膨大な貨物の中から、同行者と二人でその梱包を捜し出し、それぞれ背負って帰庁したこと等が思い出される。

## 福井震災について

鯖江市 徳田 敏 夫

福井震災当時、私は県総務部庶務課に勤めていた。上司の指示を受け岩木主事と二人で、小幡知事が会議で大阪へ出張中のため、知事夫人の安否を気づかうため、市内の山奥町にある公舎に急行し、夫人が元気で外の広場で夕食の準備をしておられて安心し、その旨を報告す。

翌日の午前1時過ぎ、武生の自宅を心配しながら帰途についた。旧北陸道を歩いて神明町水落（鯖江市）へきた時、地元青年団の湯茶の接待を受け5時ごろ帰宅した。自宅を始め武生は無事で安心した。

県庁では課全員が一丸となり、被災市町村の状況の受理、国への被災状況の報告、予算関係の申請等に追われ、夜は机に毛布をしいて蚊帳をつって休んだ。

やがて電車が福井新駅まで運行するようになり、福井新駅より歩いて通勤した。

市内等は倒壊後火災が発生し被害を大きくしたので、火元に充分注意が必要である。

# 福井大震災思い出

小浜市 中 積 茂

それは、私が県若狭地方事務所に奉職1年後の昭和23年6月下旬の夕方で、旧遠敷村役場（現小浜市遠敷地区）に出張しての帰りがけでした。

その日は梅雨空のむし暑く、どんよりと暗く立ち籠め陰気が満ち満ちた覚えが今もある程でした。突如、下腹をえぐるような凄い地鳴りが押し寄せて、何だろうと思う間もなく、大地がグラグラと動きだした。前を見ると、遠敷小学校の木造校舎が蛇のように波打っていた！この異様な光景に驚き“おー地震や”二人は自然と寄り添いながらただ呆然と……………これが私の体験した福井大震災でした。

若狭地方事務所では、早速救援の要請もあり「福井大震災にかかる若狭救援対策本部」だったのだろうか？促成の看板が墨痕も凜々しく掲示されました（暫くして災害救助法に基づくとか、若狭支隊の字句も追加訂正されたように思う）。ともかく、早急な米、衣料、医薬品らの調達、収集、輸送の業務について管内町村役場との連絡調整のため電話機の増設、職員の仮泊、炊き出し等も混雑する慌ただしい内に準備されましたが、事務の合間に「大和デパートが大火事や」とか「県庁のお堀は死人で一杯になったそうや」とかの風評に職員相互で殺気だった覚えがあります。

やがて、私は何人かの若者と共に輸送先発の指命を受けまして、出動協力を頂いた日通様や小浜貨物様らの大型トラックの救援物資の間に便乗し、ちょうど出陣するような緊張でした。当時は国道も未舗装で凹凸道に激しく揺られ、先行車が見えない程の土埃に真っ白になり、目だけがギョロギョロしていたようです。特に越前海岸では絶壁の山腹で、ガードレールも無い狭い8号線は、大型車のすれ違いが困難でした。更に、災害救援の大型車も増えて、その都度運転助手（必ず同乗していた）の笛の誘導で相当遠くまでバックし、時には後部荷台が海中高く突き出される事もあり、再々荷物にしがみ付いたものでした。しかし、遠く眺める若狭湾は長閑な静かな夜で、イカ釣り舟の漁火に郷愁を感じた事も思い出されます。

現地到着後は、橋梁が全部見事に落下した九頭竜川の中角橋近くの河原に野宿して、米の炊き出し、握り飯作業ほか雑役をしました。平屋の様に一階が潰れた二階建民家、斜塔になった大和デパート、まだ煙が残る市街地等の事は割愛いたします。

この震災から早くも50年が経過して、それに伴う社会資本等の著しい進歩は、阪神・淡路大震災時に理解していた心算でしたが、今回、たまたま当時を熟慮回顧する機会を頂いて、旧態依然の道路状況や、通話接続に何十分も要する時もある手廻しベルの交換手電話、雑音の多いラジオ、県庁や被災現地との通信に漁業無線を利用した事、またガリ版書きや謄写版印刷、腕

章やゲートル巻き等々、原始的とまで思われる追憶から……忽然とタイムトンネルが開き、懐かしいお顔や個性のある話し声がよぎる思いでありました。

## 福井震災と対応策

春江町 西澤 薫

福井大震災に相遇したのは15才。それまでに地震に怯えて家を飛び出したことが二度あったので大地震を直感した。午後の4時13分という時間帯がいくらかでも人的被害が少なく済んだのではないか、これが夕食時だったらどうなったことか、とゾッとする。家の者の安否がまず第一で1時間経て無事が分かりホッとした。すぐに役牛がいることに気づき、家族みんなで牛の救出に精出して日の落ちるまでに牛を掘り出した。翌日は泥棒が横行するので、倒れた家でも離れないようにというお触れで神社に警官が配備されたという話である。15才にもなれば危機活動隊員として日頃から指導されていれば、あの呆然と成す術を知らないという時、個人の力ではどうにもならない時、大きな知恵が湧いたのではないかと思う。

火の始末にはとても栓をひねっている間はない。対震装置がついているので、手足で震動を当てれば消えることも知っておきたい。

## 大なまが尻尾をふったとき

野地 義雄

初夏の候たけなわの6月の下旬。道幅5メートルの村道、それと平行して幅3メートル程の清流。仕事を一服するために、その岸に立って北に向かってほんやりとたたずんでいた。向こうの岸の土手、かなりの大木の桜が7、8本。その向こう側が校庭になり、その続きが校舎になる。その後ろに「畑 時義」で有名な鷲ヶ岳が、悠然と下界を見下ろしている。

なぜか、その日は下校をしていなかったように思う。そろそろ家に帰って仕事に戻ろうとして、一步退いた瞬間、目の前から30メートルぐらい下流の土手の石垣が一瞬にして川の方へくずれて、後は静かに音も無く流れて行くだけ。上流を見れば、約30メートルの土手がくずれさっていた。

さて、これは地震であることは直ぐ分かるが、どれだけの地震かは分からない。翌日になって丸岡が全滅したという情報が入り、その地震の余波が土手の石垣をくずしたことになると思って、地下の大なまの尻尾があ学校の土手をくずしたのだらうと、愕然とした。

あれから50年を経て、丸岡も震災の傷跡も癒え、当時を知る者も少なくなっている。だが、私はあの時の様子を今でもはっきりと覚えている一人だ。だから敢えて願うことがある。

「暴れてくれるな 大なまずよ!」と。

## 地震の体験

鯖江市 畑 中 省 吾

福井大震災初動の時は永平寺内の承陽殿の中にいた。当時、私は県今立地方事務所学務課（教委今立支局）に所属して、管内の婦人会役員を引率して永平寺見学の最中であった。

激しい震動の中で、寺内の最上層部から平地まで下山することは極めて危険であると判断して、承陽殿付近の大樹の根元へ一同を避難させ震動の静まるのを待った。震動は静まる気配もないので、一刻も早く下山すべきか、当面ここで時機を待つべきか、迷いに迷った。

意を決して先ず、私単独で平地の安全地帯まで下山することを試みた。幸い山内の諸建築物は被害を免れていた。かくして再び承陽殿に戻り、一同を山門付近まで避難させた。当日は寺内に泊り、翌朝鯖江に徒歩で戻った。

道路、家屋等は大混乱していたので集団行動は無理であった。三人又は五人の小集団で自主的に行動させ全員無事帰着することができた。

### ●震災復旧の体験

九頭竜川堤防の復旧のため出勤せよとの電話を本庁より受けた。指定された場所付近に徒歩で到着した。現場には県職員らしい人や復旧作業の統括者もいなかった。無論私は復旧作業用の器材や資材も携行しなかった。折角現場に到着しながら効果的行動もとれずに帰着したことを記憶している。

非常の時は、自らの判断で復旧器材等を携行すべきであると反省した次第である。

## 福井地震の教訓について

大野市 羽 生 長

あ、地震、大櫓が倒れるかの如く揺れ、子供達は無事な方向へ走り廻る。20分後、沈静。夕食後も地震の話。西空の真っ赤な事で、福井方面の大災害を知る。

翌朝自転車で福井へ。下新橋では、県道に大亀裂。福井市は大火災と知り、引き返し、災害地への人夫出動の任務に。

中学時代の地理で、何千年前から大野では、地震で倒れた家は一軒もない、地震に怖い者は大野へ、坂井郡の一部・福井市は何億年前は深海で地下は弱い、と習った。

昭和39年県議事堂の改築時、基礎折り込みで私も確認。旧議事堂は大正11年にドイツ技師が設計。一柱に付き、厚さ0.6、広さ2.5×2.5メートルのコンクリート板が伏設、一部三階建、屋根は木造鉄板葺。

戦震災が続き、「都市計画は今」と県政は旗を振り、事業は進行。後の清算に大苦勞（延坪の土地所有者、無事だった建物の移転）。

地球は人類だけの所有物ではないのに、地中、地上、空中とを問わず、大自然を荒し過ぎる。私の平成9年2月4日の初夢に、太陽は怒って、地球の周転を中止させると。人類は猛反省を。

## 福井震災について

福井市 林 幸 男

私が消防署におった頃は、甲乙二組、皆で10人位でわかれ24時間勤務の消火活動でした。もちろん、その頃は火事が出たら火を消すことでした。その後、私は縁あって県庁に入りました。

何年かして消防署は変わって、独立し人員も多くなり火事が起きたら火を消すことより予防消防力を入れる様になったそうです。

ここで、私は兵庫県南部地震の事で大きく心に感じた事を申し上げたいと思います。

地震が起きてから政府の対応の遅かった事や、消防車の活動が出来なかった事、これは道路がふさがれての事、そして火災による多くの犠牲者が出た事は残念に思っております。

今後、この様な大震災（特に密集地）に備える為には、消防車に変わる消火活動としてヘリコプターによる水の運搬消火が一番良いのではないかと思います。

それで自治体の予算によりますが、最大限ヘリコプターの設置、必要に応じて隣接の市町村

に応援してもらうことにより、地震火災での死者を最小限にすることが出来ると思います。

火災の起きそうな煙の出ている所にいち早く水を運ぶのには、ヘリコプターによる消火しかないと確信しております。これらの事を御一考下さい。

## 列車内で起きた福井地震

金津町 久 嶋 美恵子

福井第一高校の部活を終えて、福井発4時半の汽車に乗った。丸岡駅を出て間もなく、車体が上下左右に揺れたと思うと、バタンと横倒しになってしまった。誰かがドアのガラスを破り外に出たので、そこから次々と線路に飛び出した。

たんぼの水が波を立て、時々之余震で地面にかがみ込みながら線路伝いに友人と金津駅へ向って歩き出した。遠くを見ると土煙がもうもうと夕空に立ち込め、家はなく異様な風景をかもしていた。鉄橋を恐る恐る渡り、ようやく駅に辿り着いた。わが家へと歩き出したが、全壊の家の屋根が道をふさぎ、電線が垂れ下っていて危なくて帰れず、金津中学校校庭に避難した。

火事で燃え続ける街並みを眺めながら無事を祈り、一晩興奮して眠れなかった。小使さんがじゃが芋を茹でて皆に配り、空腹を満たすことができた。翌朝倒れたわが家を見てあきらめ、すすけた顔の母と対面し涙を流し合った。その母はもういない。

## 福井震災について

永平寺町 藤 井 尊 乗

勤めの帰り、私は京福電車の福井駅へ向かった。大野行きの発車直前で、電車は学生達でギッシリ。ようやく押し込まれて飛び乗った。直ちに発車。

中の方が比較的すいている様だったので、私は人混の中をジワジワと中の方へ移動した。

電車が丸山付近へ来た時、大きく横揺れした。窓外の田の苗が不自然な動き方をしている。風とは異う。“地震だ”と気付いた時、電車は急停車したが、次の瞬間右側へ横転した。

私は打伏に倒れて網柵でしたたか胸を打ったが、痛みをこらえてようやく窓から車外へ出た。街は100m先が見えないくらい、砂煙が立ち上っていた。

横転した電車の下敷きになって死んだ者が数名あったとの事。私の知人の娘もその一人であった。恐らく、揺れのため扉が開き（当時はまだ手動式であった）人の揺れで車外へ押し出され

たものであろう。私は紙一重の差で助かったのだ。今でも圧死した人の事は他人事とは思えない。いつどこで、どんな事故にあうか判らない。

“車の世 シートベルトが命綱”

## 福井震災の教訓について

丸岡町 藤澤良雄

県庁近くの建築現場での貴重な体験は今日も脳裏に浮かぶ。不意に訪れた強い上下振動・横振動、人は毬のように跳ね、木造二階建は一階が潰れ二階が上に居座る。傾いたビル、石垣の崩れ、瓦礫の山、火災はすぐ発生し、夜の駅前周辺は山火事のごとく凄かった。

倒壊した家の前で放心状態から立直り家族の安全確認から食糧等を皆で探し求める姿、皆生きて無事を喜ぶ姿、反面絶句する事柄も、気になる事象多いが情報なく、不安な一夜を過ぎ帰路につくも徒歩のみ。途中悲しい事との出会い、舟橋の小舟、田圃の苗の乱れ、山裾に建っていた家屋が印象に残る。

体験から人間関係の要等苦節に負けず生きる自己が育ち、建築物は耐震工法に改め施工、道路は拡張整備され、電信も飛躍的に伸び、家庭のLPガス、灯油ストーブ等普及は抜群だが防災面に欠如がある。

緊急時の諸々の準備を含め意識の高揚が不可欠と思う。

## 福井大震災

丸岡町 藤田長久

満7歳の時、丸岡町北横地（追分）という震源地の間近い所に住んでいました。家の近くの小川で女の方数人が夕食の準備をしているのを柿木の根元に坐って見ていたときです。突然、東の山の方からゴッーという音が聞こえました。グラグラと大地が揺れ、川の水が波打ち、洗っていた里芋が宙に舞い、‘地震だ！’と叫び声がありました。

皆自分のことで一杯だったのでしょう、声を掛けられた覚えもありませんし、気が付いた時は人の姿はありませんでした。よたよたと定まらない足取りで、国道筋に出ました。全ての屋根が自分の目線上にあり、壁から出る土煙で一面まっ白でした。夢遊病者のように自宅の屋根沿いに裏庭まで行きました。両親は呆然と立っておりましたが、私を見るなり“無事やったか”

と母に抱き寄せられ、はじめて我に返りました。

まもなく、近くの工場から出火し、火柱が立ち上がり近所の男達は走って行きました。竹藪に集まった何組かの家族が、寄り添うようにして余震に怯えながら火事の成り行きを見守っていました。また、その近くで「講」を開いていた家では多くのお年寄りが下敷きになって亡くなりました。

## 福井地震災害復旧の体験

今庄町 藤田文衛

福井震災の昭和23年6月28日当時、私は鯖江高校生でしたから、福井地震対策本部との関係はよく分かりませんが、時刻は午後4時頃であったと思います。家に居りましたから直接の被害はありませんでしたが、大変な揺れを感じ、屋外へ一時避難したおぼえがあります。

震災直後の7月中頃から農業高校生として災害復旧に動員され、主に水稻の田植作業で、場所は福井市近郊（たしか木田村地域）と現在の坂井町（木部村）あたりと思いますが、地震後の深い泥田に素足ではいり、他県から取り寄せた大きな稲苗の植付け作業に何日か従事しました。

その後、夏休みに入ってから、国鉄の福井操車場で、当時長い間不通となっていた北陸線の線路復旧（バイトで）にも長期間参加した記憶が残っています。

## 福井震災の体験談

織田町 堀 恵子

福井震災の時、私は12才でした。姉と二人で畑（今はオタイコヒルズのステージの所が私の家の畑でした）でじゃがいもを掘っているとゴーと言う土の中の音、胸の中まで響く音。なんだろう。何が来たのだろう。

姉は、「恵子、家においてきた妹や弟をビシヤモン谷の竹やぶに連れて行け。」私は「うん」と小さな声で言いながら走り出す。

北陸窯業の横の道巾は70cm、くねり道。この道でさえゴーと鳴るたび道が割れる。その割れた所に足がはまり、わらゾーリが取れない。素足で泣じゃくりをしている弟や妹の所にたどりつく。子供達の手を引きながら竹やぶに来た。するとどうでしょう。竹がみっしり立並んでい

る所は地面が割れない。中でも大きな竹にしがみつき3人はふるえた。何度も何度もゴォーゴォーと来るのだが地面にひび割れが来ない。

佛様、神様、私達をお守り下さい。と何度も何度もくりかえした。

「昔から地震の時は竹やぶに入れ」と言う言葉にありがたいと感謝致しました。

## 福井地震を体験して

大野市 前川房枝

窓に干してある洗濯物を取り入れようとした時、「ゴォードスン」という音と共に壁がくずれ落ち、目の前が真暗になり、思わず文机の下へ頭を突込みました。その後に揺れがきたので、はじめて地震だと分かり振り向いてみると、柱やかからかみが倒れて来た。幸い、平屋の部屋だったので全壊にならず、片側の窓が開いていたのでそこから外へ出てみると、二階の病室がそのまま落ちた状態でした。その時、先生の声で「大丈夫か」と聞え、炊事場の火を早く消す様に言われて、揺れる中消火にあたり、患者さんの様子も見て歩きましたが、皆外に出ておりました。

外科病院だったので、けがされた人が何人か来て「先生何とかして下さい」と悲痛な声で頼まれ、ガーゼや包帯を使って応急手当をするよう指示されました。看護婦がその対応に追われている時、東の方向から火の手が上がったので早く避難する様に言われ、足羽河原へ逃げました。火事は広範囲に広がり、勢いも激しく火の粉が飛んで来ました。市内の空は真赤に染まり、その空の上にたくさんの鳥がざわめきながら飛んでおり、まるで火の鳥が飛んでいる様に見えました。その時の状況は今でも目に浮かんで来ます。

福井地震で思うことは、火災があったために被害も大きく、また尊い人命も多く失われたのではないのでしょうか。翌日、駅前や映画館前等で逃げ遅れた人達の焼死体を何人も目の前にしてつくづくと思いました。火災が発生しなければ、また早く防火体制がなされていたらと残念に思われてなりません。

## 福井地震体験談

芦原町 前田 ヒデ子

その日は、風もなくどんよりとしていた。ごおーという不気味な音。ぐらぐらぐらっ、「地震だ」。

台所に居た私は、20歩くらいの廊下をつっ走り、居間で遊んでいた6才の甥と3才の姪の所へ。すかさず2人の手を引いて玄関に向かって逃げようとしたけれど、揺れは段々ひどくなり、6メートル程の先へ出るのに、まるで波の上の船の中を歩くがごとく気はあせるばかり、右へ左へ前へ後へ何秒だったか、ずい分長く思った。そして、ようやく玄関から外へ逃げる事が出来た。助かったのだと思っていると、どどどと家や作業場が潰れ、辺りは土煙で息もできないくらい。三人は庭の真中で埋くまっておびえていた。

すると、田んぼの方から家の者が叫びながら帰って来た。その夜は、近所の潰れなかった家に集まり、一睡も出来ず、金津町の真赤に燃える日を心臓の高ぶりを感じつつ朝まで眺めていた。あれから50年、今も脳裏に焼きついて忘れる事が出来ない。

余震に怯えつつ、ハサ木で柱を建て、藁を編んで屋根を葺き、藁囲いをしたバラックの中で生活をしていた。当時、私は20才で結婚3ヶ月目でした。水は井戸水、田舎ゆえに自給自足できたのです。地震が来たら1に消火、2に外へ逃げる。常日頃から、毛布、電池、ラジオを枕元に置き、飲み物菓子等を準備している。街に住む人と田舎では環境が違いますが、老二人住む現在、この方法を肝に銘じております。

## 災害対策本部での体験

福井市 牧野 保孝



～前進基地要員のスナップ写真～  
忙中閑あり、前進基地の精鋭。  
ゲートル・地下足袋姿多し、戦闘帽まじる。

戦後、サマータイムが採用されていた時、順化小学校グラウンドで草野球の最中、ズドンと持ちあがった瞬間、ペシャンコのバラック校舎が目前にあった。

当時、失業保険徴収課員（満20才直前）、労働大臣に人事給与権がある地方事務官の新米だった。地震対策本部としては、県本部に完全に総括されていた。

九頭竜川に架かる主要橋が落下した為、北信越・富山石川方面からの救援物資が坂井郡中央どまりとなっていた。県庁舎自体も南からの救援物資の山で、庁内各課に山積みされていた。各部課から選ばれた三十余名が、丸岡平章小学校グラウンドを基地とする、県本部前進基地づめとなり、私もその一人だった。順次交替で派遣されたのである。

## 福井震災について

坂井町 松浦 欣哉

福井市町屋町に在った県立農業試験場種芸部に勤務中に被災した。部員一同でナタネ原種（農家へ配布する高純度の種子）取り入れを終わったところであった。建物は倒れ貴重な種子を失った。また、秋には重要な品種の幾つかは収穫不能となる被害を受けた。

倒壊建物から出火があり、科学部（分析作業中であった）からの火は隣接した二棟余を焼失し、種芸部では標本壇が割れ出火したが、居合わせた者が有り合わせの容器で水を手送りし、消火させた。何よりも構内の建物は機能別に独立分散していたので、焼失被害は少なかったと思う。標本壇からの出火は意外であった。火元は思わぬ所にあるものと感じた。

近くの銭湯で被災者があり救出を求められたが、鋸やジャッキ等がなくて遺体を外に引き出せなかった。何よりも痛感したのは、この様な時に組織的に働ける人がいないことであった。せめて器具、資材は平素から取り出しやすい所に置くように心している。

## 福井大震災における救護活動について

大野市 水上 和子

昭和23年6月28日の大地震の発生時には大野保健所に勤務中であった。大きく揺れ動く地震に職員全員が不安と緊張で声も無く、急いで家屋外へと飛び逃げ出した。当時はテレビも無く、唯一の情報源としては電話とラジオが頼りであった。予震が次々と続く中を皆んな家路へと急いだ。

すると直ちに上司からの指示があり、救護班編成により従事する事になった。そこで市内の薬局より各種衛生材料や救急薬品等々を集めて貨物トラックに積み込み、医師と共に8名の班員が福井県庁前にと向ったのであったが、道路のいたる所には深いき裂が入っていて、続く予震に自動車はスピードも出せず苦勞しつつ走った。松岡町の近くまで運行したが交通遮断の為

に仕方なく下車して、リヤカーに荷物を移して押しつつ歩いたのである。道中では負傷者と出会い、その処置を施しつつ福井市街地へと急いだ。夜空は赤々と火災による炎の光で熱気にあふれ、身の危険を強く感じつつも目的の地震対策本部へと急ぎ昼過ぎに到着したのであった。

そこには負傷者が多く列を組んで次々と手当を受けていた。重傷者は輸送車で次々と指定病院へと搬送されていた。私達の班は春江方面へ配属が決まり、九頭竜川橋の欠壊により舟で渡った記憶がする。到着するや家屋の倒壊がいたる所に起きていて、消防団員の方々や町の役員さんの情報を受けて負傷者の手当や病人の方達の治療と処置にと3日間の救護活動を体験したのであった。そこで勤務の都合により交代制が計られて、私達の班は再建復興を祈りつつ再び途中まで歩いて帰った事を思い出されるのである。

## 復旧作業に従事して

武生市 三田 佐智子

福井地震発生後、3～4日位して村の青年団の一員として（復旧要員として）出動しました。県庁前に集合と言う指示を受け北陸線に乗り（福井駅折り返し運転）県庁広場に行きました。そこには何かしなければとの思いを抱いた人達が一杯でした。程なくして来たトラックに乗って、被災現場に行き、二階建ての家が、自分の目線に崩れているのを見て、改めて地震の恐さを知りました。（中角橋近辺）

九頭竜川に架った橋は落下し通行不能の状態、人々は河原に下りて流れに架けられた板橋を渡っていました。この様な状態の中で復旧に人手が必要な事は明白ですが、何をどうしてよいものか、命令指揮をとられる方も困られたのではないかと思います。手弁当、交通費持ちの参加でしたが何も出来ず徒労に終わりました。その後、半月ばかりして農業試験場へ草取りの要請をうけて（日当、旅費を支給との事で）団員を誘って出掛け除草作業をした記憶があります（然し賃金支給の有無は不確実）。現在は応援、受入れ体制等、成文化されていると思いますが重要性を痛感したものです。

## 巡りきし震災忌に寄せて

金津町 三 谷 彰

福井震災は私の中学2年の初夏であった。

当時はおきまりの食料難で、学校から帰り近くの山を開墾した畝で、植えてある甘藷苗の枯れたものを差し替えに行っていた時である。地鳴りに続き猛烈な地面の揺れ。足元の地割れ。立っていられず這いずくまった記憶が今も鮮明にある。その山から見下ろした金津の町は一面の土煙。建物が倒壊したその壁土からのものである。ややあってようやく倒壊している家々の屋根伝いに家へと戻る。

5、6軒離れた近所の家から煙が立ちのぼっているのが見える。それも間もなく赤い炎に変わっていき、おそらくは倒れた家の下の方を火が這っているのだと思えた。隣家の屋根には、その家の兄弟が必死に救出作業の様子。腰骨が家の梁に挟まって出ることの出来ないお嫁さん。その足元には姉妹嫁だった姉さんも居るといふ。

私の家でも妹が下敷き。両親が必死に掘り起こしたが、これも柱が邪魔で出せない。消防活動と言っても水道ホースからチョロチョロと水が出ている程度。その消防士Kさんが持っていた鋸でようやく救出。祖母は縁の下で風呂焚き中だったので助けるすべもない。恐らく即死だったろうと、そう思う事が両親にとってはせめてもの慰めだったのか、と今にして思う。消防も機能しない中、やがて火が迫る。熱い風が押しよせる。隣家の軒にも火が。狂乱の隣家夫婦、生地獄とはこの事か。助けられぬを詫び手を合わせ拝みながら退かなければならぬ無念さ………。今もまざまざと思い出すシーンである。今はその兄弟も故人になられ私の両親も亡くなり、見回すと私がその生き証人となっている。

助け出した妹も翌日内蔵が破裂していたか、あえなく8歳の生涯を閉じた。それも避難した近くの神社の境内の戸板の上で。火葬といっても倒壊している火葬場の側地で寄せ集めた木々で茶毘に付しただけの事。その翌々日に父と店のあった自宅跡に行く。まだ地表を埋め尽くしている壁土は熱く、全ての財産は灰になっている。棒っ切れで掘り起こすが完全に焼けきっている。大事にしていたという銀の茶托なども一塊の物でしかない。小さな土偶の火傷した布袋さんが1個ポツンと。

50年経った今も、それは我が家の神棚に鎮座している。全てを見ていた歴史の証として。

食べ物が潤沢でなかったあの時の食いの思い出は、その折り救援物資として配給されたラッキョウとキューバー糖である。近くの役場跡地に山積みになっていたのが思い出される。それと救援品として配られた米軍の携帯食。ブレックファーストとかランチとか書かれたパッケージの中味は色々とセットされていて、そして美味しかった。唯一の楽しい思い出である。

ここで一つ提案がある。例えば、我が町は1万7千人規模の町だが、町の敬老会参加対象者は1,800名余。その人達に毎年配られる記念品を救急保存食品セットに出来ないものか。最近のそういう製品は3、4年は大丈夫、3食セットならその分を毎年敬老会の終わった時点で調達すると、約6,000食が翌年同期までの緊急保存食糧として町に備蓄されることになる。これを繰り返せば常に在庫できるし、これを県全域で取り上げれば、県内で24万食もの非常時への備蓄となるのだが。

## 福井震災の被害状況について

鯖江市 村上 武

当時の勤務先…福井県南条地方事務所経済課

昭和23年6月28日午後5時20分過ぎには、旧国道8号線沿いの居宅（鯖江高校下）に帰宅しておりました。

7月1日早朝に家を出て、徒歩で8号線を、鳥羽中から不通の福武線の路線上をたどって福井に出る。麻生津から福井新まで駅ホーム・駅舎が30cm以上沈下し、線路が異状に高まった感じでした。九頭竜川の渡河は、落下した国鉄の線路伝えに行き、目的地の春江町高江の親戚に、倒壊家屋の下敷きになって、亡くなられたお二人を弔問し、避難小屋を出て、芦原街道、九頭竜川落下鉄橋、順化の国際劇場、人絹会館、大衆館前を通過して、8号線に出たが、大衆館前に並んでいた焼死体10体程のなかば炭化した様子を大名町交差点から眺めた。福屋百貨店7階建が真中で鍵状に折れた姿が、今もあざやかに憶い出されます。

## 地震体験談

芦原町 八木 美津子

暑い日だった。私は5時に仕事を終わると風呂場に急いだ。湯舟の所まで行った時、飛び上がったようになり、それから横にぐらぐらとゆれ始め、服を持ち外へ皆逃げたが、その時すでに工場が倒壊していました。

余震がひどく、恐怖で皆固まって地面に座っていました。暗くなってきた時、金津町が燃え出し、一晩中真赤な炎が夜空を明るくしていました。

その時、空白だった頭の中に家の事、家族の顔が浮び、翌朝早く、友達と皆で家に帰りまし

た。しばらく行くと、田圃の中で死んだのでしょうか、頭から足まで泥まみれの人を戸板にのせて行く人達と何人も会いました。皆、無言のままでした。余震の続く中、倒壊した家を見つけながら亀裂の道を急ぎましたが、いつもは1時間もあれば帰れる道も、早朝から夕方近くになって着きました。村は皆倒壊していて、ずっと遠くまで見渡せました。でも、家族が皆無事だったので初めて涙が溢れました。

道で見た泥まみれの屍骸は、今でも頭の中に強烈に焼きついています。地震は天災です。

## 忘れられない福井地震

春江町 八 杉 健 一

現JR（国鉄）福井駅の下ホームで、友達と話しながら通勤帰りの列車を待っていた。その時グラグラときた。立っていることが出来ず、すぐさま線路に飛び降りて両手をついた。確か竹藪と同じ構造だからこの方が安全だ、と言いながらの咄嗟の行動だったと思う。

しばらくして立ち上り、辺りを見廻しても駅舎はもちろん、ホームの建物もそのまま立っていたと思う。急いで駅前に出てみると、西に傾いた太陽は潰れ家屋の壁土等の埃で黄土色に覆れ、この世の終りかとも思われる異様な光景だったように記憶している。

すぐに家のことが心配になり、急いで線路伝いに歩きだしたところ、日の出の線路上に機関車ともども貨物列車が東側に横倒しになっていた。九頭竜川の橋は道路も鉄橋も落下、どうにか垂れ下って連っている線路の上を四つん這いになりながら、ようやく渡り森田に入る。どこもかしこも無惨な全壊。ここで友達と別れ、一人春江の我が家へ辿りつく。母家が東の方に全壊していた。呆然と立ちつくしていた。

## 忘れ得ぬ恐怖、あの惨事

丸岡町 山 田 不 美

昭和23年6月28日午後6時前だったと思う。2尺袂の着物に白足袋を履いてお茶のお稽古の最中、ぐらっとしゃくる様な揺れが何回か来た。地震だ！立とうとするが、足は滑るは、袂は踏むわ、恐怖でその場にうずくまってしまった。それからどれだけたったのか……。

誰かが今のうちに庭に逃げようと…草履も履かずに、こける様にして庭の端の竹藪に駆け込む。

お年寄りを連れてくる人、戸板に動けぬ人を乗せてくる人。どの人も一様に死ぬかと思つたと。

「ナムアミダブツ、ナムアミダブツ」と、他の語らいは全然無し。30分程して、大きな揺れも来なくなったので家へ。店の品物は散乱、一部の壁は落ちていたが、皆無事でまずまずとホッとす。夜は外にゴザを敷き、皆抱き合うようにして一睡もせず夜明けを待った。遠くの田んぼで二晩も過ごした人もたくさん居た、と後日聞いた。

震源地は福井と聞きどんなにか、ひどかろうと思つた。一週間たつて福井へ行った人の話によると、九頭龍川の鉄橋が落ちて汽車は森田駅まで。川は舟で渡り、福井までは市の用意してくれた車で行ったとか、道はガタガタで振り落とされそうだったと。福井は倒れた家や火事で焼けた跡ばかりで、向こうの方の山がくっきりと良く見えた。

一番驚いたのは、あの大きく頑丈な大和デパートが傾いて、今にも倒れそうだった事。ともかくも惨さんたるものだった。

昭和24年、福井市に下水道の大工事が始まり道路が掘返されると、あちこちからシャレコウベがたくさん出てきた。特に映画館や歌舞伎座からは大量に出たこと。

心からご冥福をお祈り致します。

## 福井震災体験談

福井市 吉田早苗

震災当日、私は高校三年生で、福井より金津町笹岡の自宅への帰宅途中で、国鉄北陸線の列車に乗っていた。丸岡駅と金津駅の間で地震が起きた。

列車は三国まで行くローカル線で、二輛のうち一輛は木造で、私はその木造の方に乗っていて、車輦はばらばらに壊れ、床板と座席だけで田へ放り出された。

そしてようやく立ち上がったが、周囲の部落はすでに全壊し、もうもうと土煙が上がっており、田はまだ余震で揺れていた。大人の人が「怪我した人はいないか」と見廻っていた。少々の傷を負った人が一人いただけだった。

それから、くねくねと曲ってしまっている線路伝いに、鉄橋も陥落しているところを渡って帰った。途中、金津の町は火の手が上っていた。家に帰ると、家は傾いており、後日突っかい棒をした。その日より1、2日は余震のため近くの竹藪に蚊帳を吊って寝た。

### Ⅲ 福井震災50周年事業の概要

# 福井震災50周年事業の概要

福井震災50周年を契機に、再度、防災に対する備えの重要性を喚起し、県民の防災意識の更なる高揚を図るため、市町村や防災関係機関との連携のもと、福井震災50周年事業として、各種防災イベントを実施した。

## 1. 福井震災50周年事業の基本コンセプト

- (1) 震災で得た貴重な教訓を風化させることなく、50周年を区切りとしてその教訓を防災意識として啓蒙するとともに、今後の日々の生活に生きづかせ、併せて後世にその教訓を伝承する。

(教訓の伝承)

- (2) 福井震災、阪神・淡路大震災の経験および世界の都市震災でも得られた都市防災の教訓をもとに、地震に強いまちづくりの推進と新たな防災コミュニティのあり方を示す。

(都市震災の教訓と防災コミュニティのあり方・ボランティア意識の啓発)

- (3) 新たに改訂された福井県および各市町村等の地域防災計画および防災業務計画に基づき、震災に対する地方公共団体および防災関係機関等のあり方を住民に示す。

(防災体制のあり方)

## 2. 事業内容

- (1) 福井県防災キャンペーン
- (2) 福井震災50周年犠牲者追悼式
- (3) 近畿府県合同防災訓練
- (4) 日本地震学会 一般公開セミナー
- (5) 世界震災都市会議 他

## 3. 各事業の概要

### (1) 福井県防災キャンペーン

- 主 催：福井県防災キャンペーン実行委員会  
(事務局 福井県県民生活部消防防災課)

#### ①福井県防災フェア

- 開催期間：6月27日(土)～29日(月)

- 会 場：福井県産業会館
- 内 容：日常生活の中で必要なさまざまな地震防災の知識を、簡単な体験を通じて身に付けてもらうための防災イベント。

○福井震災被災状況写真展【写真1・2】

- ・震災当時の写真パネルや新聞記事などを展示（約60枚）



【写真1】福井震災被災状況写真展

○福井震災記録ビデオ放映

○災害体験トンネル

- ・地震発生（家の中）  
起震装置、被災映像、特殊音響効果により地震を仮想体験し、室内における危険さを学ぶ。
- ・余震発生（市街地）  
大型モニターによる被害状況映像と特殊音響により余震を体験し、地震発生直後の屋外の危険さを学ぶ。
- ・津波・土砂崩れ発生  
津波、土砂崩れの映像を200インチのモニターで放映、自然の恐怖を実感してもらう。臭い、霧状の水などで演出。
- ・火災発生  
ビル火災に遭遇したという想定で、火災・煙の怖さを実感してもらう。立体音響、照明、臭い等で演出。



【写真2】新聞に見る福井震災

○防災クイズ巨大迷路

- ・防災に関するクイズをクリアしながら、ゴールを目指す迷路。
- ・身を守る知恵／地震から身を守る知恵をパネルにて紹介。

○こんなに危険がいっぱい！コーナー

- ・屋外編／倒壊家屋や瓦礫を再現し、屋外の危険箇所を示す。
- ・屋内編／地震後の部屋の状況を再現し、屋内の危険箇所を示す。

○防災コミュニティ資機材展示コーナー

- ・防災コミュニティ資機材を展示するとともに、自主防災組織の紹介と参加を呼びかける。

- 語り継がれる福井震災コーナー
  - ・福井震災の体験談をパネルにて紹介。  
当時の支援に対するお礼を掲示。
- 消防団活動紹介展示コーナー
  - ・県内消防団の活動紹介と資機材の展示。
- 消火シミュレーション【写真3】
  - ・正しい消火器の使い方を体験。
- 地震に強い家づくり相談コーナー
  - ・「わが家の耐震診断」や地震に強い家づくりの相談を実施。
- 応急手当体験コーナー【写真4】
  - ・包帯・三角巾の巻き方、消毒・止血、人工呼吸の仕方等の体験。
- 災害サバイバル体験コーナー
  - ・空き缶で作る簡易コンロ、食用油の安全ランプ、ペットボトルで作る浄水器。
- 屋内ステージ【写真5】
  - ・119番電話トーク教室、ボランティア活躍トークショー、災害サバイバル実演、応急手当実演など。
- 避難所体験コーナー
  - ・避難所の生活をセットで再現し避難生活の必要事項やルールを紹介。
- 災害対策通信システム体験コーナー
  - ・マルチメディア端末搭載車によるパソコン、衛星通信システム等の通信を体験。
- ボランティア活動紹介コーナー
  - ・県内・外のボランティア団体の活動等の紹介。
- 災害弱者への支援コーナー
  - ・災害弱者を災害から守るためのポイントや誘導方法等を紹介。
- 出展団体コーナー【写真6】
  - ・45団体が出展。



【写真3】消火シミュレーション



【写真4】応急手当体験



【写真5】屋内ステージ  
(災害サバイバル実演)

- ・防災関係機関の活動紹介／県、市町村  
および消防等の防災関係機関による災  
害時の活動、防災体制等の紹介。
- ・防災機器の展示・販売／防災機器や防  
災グッズの展示販売。



【写真6】防災機器等展示販売

- 非常食試食・販売コーナー
- 炊き出し試食コーナー【写真7】
  - ・野外炊事車や大鍋による炊き出し。
- 緊急車両等展示コーナー【写真8】
  - ・消防車、はしご車、災害支援車、防災  
ヘリコプター等の展示。
- 屋外ステージ
  - ・レスキュー犬訓練披露、防災〇×クイ  
ズ、ラジオ番組生放送 等。



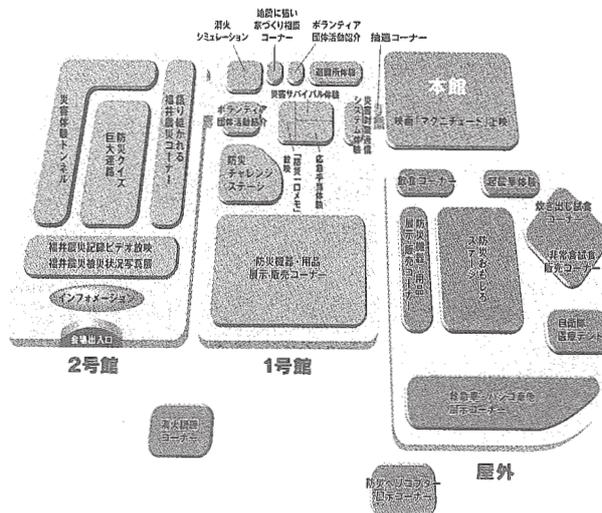
【写真7】炊き出し試食コーナー

- 起震車体験コーナー
- 防災クイズラリー
  - ・会場内各コーナーに説明・紹介されて  
いる事項をリーフレットの中にクイズ  
として出題。
- 防災シアター
  - ・映画「マグニチュード」上演。



【写真8】緊急車両等展示コーナー

<会場マップ>





## ②福井県防災キャラバン

### ■開催期間・場所：

- ・敦賀市（ポートン） 5月31日(日)
- ・勝山市（サンプラザ） 6月6日(土)
- ・三国町（イーザ） 6月13日(土)
- ・鯖江市（アルプラザ） 6月21日(日)

### ■内 容：

- ・起震車の体験、防災〇×クイズ、震災写真展、「被災者の声」募集、「防災標語」の募集、「防災の知恵」パネル展示



【写真9】防災キャラバン  
(敦賀市内ショッピングセンター)

## (2) 福井震災50周年犠牲者追悼式

- 主 催：福井震災50周年犠牲者追悼式実行委員会  
(事務局 福井県県民生活部消防防災課)

- 開催期間：6月28日(日)

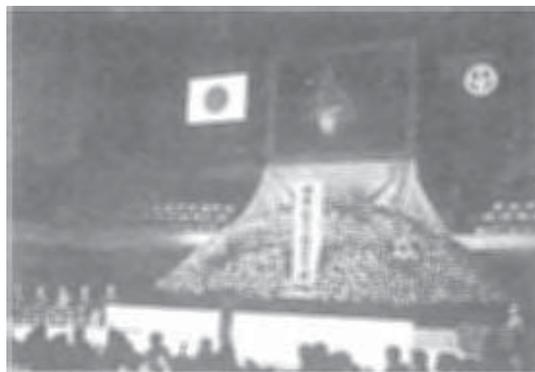
- 会 場：福井県立音楽堂（ハーモニーホールふくい）

- 内 容：福井震災50周年という節目の年に当たり、福井震災による犠牲者の追悼式を開催。

### ○追悼の部【写真10】

- ・主催者、皇族ならびに貴族代表等の追悼の言葉と福井交響楽団および県内合唱団による鎮魂歌を主体として震災犠牲者の冥福を祈る。

(犠牲者名簿奉呈 黙祷 追悼式辞  
献奏・献唱 追悼のお言葉 遺族代表  
の言葉 献花)



【写真10】追悼の部

### ○決意の部【写真11】

- ・薄らいでゆく福井震災の教訓を体験者の語りにより再現し、震災を知らない若者に教訓を託し、防災の決意を更に次世代に引き継ぐことで誓いを新たにしました。

(献奏「回想の演奏」 体験者の語り



【写真11】決意の部

献奏「追悼の演奏」 次世代への伝承 献奏「誓いの演奏」)

### (3) 近畿府県合同防災訓練

■主 唱：近畿府県災害対策協議会

■主 催：福井県、三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、  
徳島県

福井市、敦賀市、三国町、福井県内32市町村

(事務局 福井県県民生活部消防防災課)

■開催期間：10月31日(土)

■会 場：

- ① 主会場 テクノポート福井（福井港北埠頭横の県有地）
- ② 福井会場 福井市街（足羽川木田橋上流、福井駅前通り、J R南福井駅）
- ③ 敦賀会場 敦賀港（旧フェリー埠頭）
- ④ 分散会場 福井市、敦賀市、三国町以外の32市町村（実施日が異なる場合あり）

■内 容：阪神・淡路大震災を契機として締結された「近畿2府7県震災時等の相互  
応援に関する協定」に基づき近畿府県合同防災訓練を実施。福井県総合防  
災訓練、福井市防災訓練、敦賀  
市防災総合訓練、三国町総合防  
災訓練、福井県内32市町村防災  
訓練および緊急消防援助隊近畿・  
中部ブロック合同訓練を併せて  
実施。

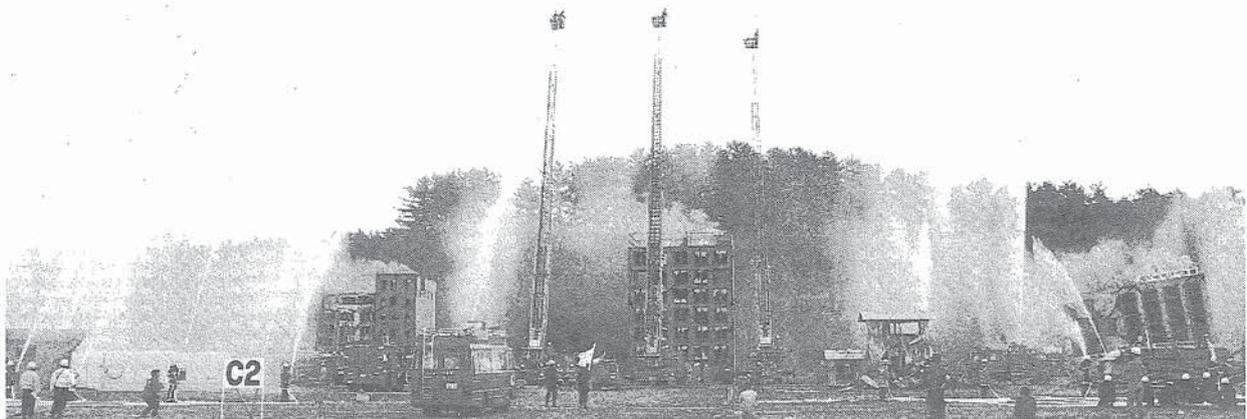


【写真12】倒壊家屋建物救助訓練

- ・福井県内で福井地震並の大規模地震が  
発生したとの想定で、近畿のほか、中  
部や北陸からも消防、警察、自衛隊等  
の防災関係機関の参加を得て大規模か  
つ実践的な防災訓練を実施。
- ・最新の防災資機材を活用した大規模火  
災消火【写真14】、倒壊家屋や高層ビ  
ルからの救出救助【写真12・13】、医  
療救護活動、ライフラインの復旧、油  
流出除去等。



【写真13】座屈ビル救助救出訓練



【写真14】大規模火災消火訓練

- ・福井震災50周年に当たり、主訓練の会場となる福井市、敦賀市、三国町だけでなく、分散会場という位置付けにより、全市町村がそれぞれの地域の実情に応じた防災訓練を実施。

■参加規模：

機 関	247機関 (分散会場を加えると約420機関)
人 員	約10,200人 (分散会場を加えると31,100人)
車 両	約530台 (分散会場を加えると約970台)
航空機	25機
船 舶	18隻

(4) 日本地震学会 一般公開セミナー「福井地震から50年」

- 主 催：福井県、日本地震学会 共催
- 開催期間：10月29日(木)
- 会 場：フェニックスプラザ(福井市)
- 内 容：日本地震学会1998年度秋季大会の福井での開催に併せ、福井地震をテーマとする県民を対象とした公開講座を実施。
- 「地震と活断層 ー福井県の活断層を考えるー」
  - ・講師：地質調査所 衣笠 善博
  - ・県が実施している福井地震の原因となったと考えられる活断層の調査概要や地震と活断層についての知見等の紹介。

○「活断層の履歴調査と地震考古学」

・講師：地質調査所 寒川 旭

・近畿・北陸地域を中心とした活断層の履歴調査（トレンチ調査）の紹介。遺跡発掘現場に姿を現した液状化現象・地割れ・地滑りなどの地震の痕跡と古墳などの遺構の変形についての事例の紹介。福井地震で発生した地変についての言及等。

○「よみがえる福井地震」

・講師：理化学研究所 谷口 仁士

【写真15】

・震災当時、福井に駐在していた米極東軍総司令部が中心となって作成した「被害調査報告書」を福井震災50周年を記念して「よみがえる福井震災」として発刊。福井震災とはどのような災害であったか等について説明。



【写真15】一般公開セミナー

(5) 世界震災都市会議

■主 催：福井震災50周年記念事業「世界震災都市会議」開催実行委員会  
(事務局 福井市)

■開催期間：平成10年4月～6月

■会 場：フェニックスプラザ（福井市）他

■内 容：21世紀の「国際防災安全都市」を目指す3ヶ月。

○福井市民防災フォーラム

・4月19日(日) 福井商工会議所ビル

阪神・淡路大震災を体験した知識人による講演、および福井震災体験者等によるパネルディスカッション。

○福井フェニックス・アート展

・5月～6月 フェニックスプラザ他

薄れつつある福井震災と復興に向けた先人たちの歩みを若い世代に再認識してもらうため、「フェニックス」をテーマとしたアート展を開催。

○第3回全国消防音楽隊マーチングフェスティバル

・6月20日(土)、21日(日)

「第3回全国消防音楽隊マーチングフェスティバル」を誘致、全国から32隊が

参加。音楽を通じて災害に強い安全なまちづくりをアピール。市内中学校でのミニコンサート、約1kmの市中パレード、県立体育館でのマーチングフェスティバルを実施。

○「世界震災都市サミット」

・6月26日(金)～28日(日)

世界の地震被災中小都市や国内被災都市の首長を招き、21世紀の新しい中小都市防災の指針を国際的な観点から探る国際会議を開催。

○「国際中小都市防災専門家会議」

・6月26日(金)～28日(日)

地震・防災分野の専門家による本格的な学術会議。一部サミットと合同で開催。

○福井市民の手による半世紀復興写真展 など

## (6) その他

このほかにも、県内各地で防災に関する講演会や福井震災パネル展等が催され、防災意識の啓発が行われた。